HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア革命と辺境植民地 : 中央アジア・セミレーチェ地方を中心に (1918-1922年)
Author(s)	西山, 克典
Citation	北海道大學文學部紀要, 39(3), 1-72
Issue Date	1991-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33573
Type	bulletin (article)
File Information	39(3)_PL1-72.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 39-3 (1991)

ロシア革命と辺境植民地

——中央アジア・セミレーチエ地方を中心に (1918—1922年)——

西 山 克 典

はじめに——課題の設定——
Ⅰ ソヴェト権力の樹立
Ⅱ 一党制の形成
Ⅲ 内戦と農民革命
Ⅳ 入植農民の社会的行動
Ⅴ 土 地 改 革
結びにかえて

はじめに——課題の設定——

ロシア中央部 Центральная Россия の周縁にひろがる辺境地域 окраина は，ロシアの征服と支配をうけ，植民と開発の対象とされてきた。この辺境地域は併合と支配により，帝政ロシア，あるいは，その後のソ連邦の全的動勢に搦め込まれることになるが，それぞれの地域に内在する固有の史的律動も保持していた。この史的律動は，時としてその力と振幅を増し，帝国や連邦の全的律動を破り，自立的波動を鮮かに示す。それは，一定の条件の下では，国家的独立まで政治的昇華を遂げるが，戦争・革命・内乱のなかで国家が危胎に瀕し，それを枠組とする全的律動が変調と衰退をきたす状況のなかでも，自らの自立的波動を顕現させるのである。帝政ロシアからソ連邦に至る，多様な地域から成る研究対象を理解するために，地域に内在するこの史的律動の把握は必要不可欠であろう。地域は，単に，全体を構成する全体と同質の一区分ではなく，全体と異なる律動を内在させていると認識されて，はじめて，地域は歴史研究の対象として十全な資格を得，全体の把握もより

構造的に深められると思える。

さて，帝政ロシアの辺境地域では，この史的律動は，それを形成する様々な要因—自然，民族，隣接地域・国家との位置関係など—の合成であるが，植民はそれらのなかでも大きな規定要因の一つであった。歴史家クリュチェフスキーは，嘗て，「ロシア史は植民されるくにの歴史である」と述べ，植民に視座をすえたロシア史全体の時期区分と把握を提唱したが[1]，辺境地域は，植民によって地域の史的律動の基調がまさに与えられる歴史的空間なのである。シベリア南部から，カザフとキルギスのステップ，南ウラル，さらにコーカサス地方，クリミヤ半島へと続く遊牧民の世界は，この植民と中央からの支配の対象とされた地域であった。この地域はさらに国境を越え，モンゴル，新疆，チベットへと連なるユーラシアの草原を成し，ここは，反植民主義を掲げ，民族の自立と解放を求める牧民の，いわば「草原の革命」が展開される場となった[2]。本稿の対象とするセミレーチエ地方は，ユーラシアに跨るこの草原のほぼ中央の十字路に位置し，帝政ロシアの中央アジア支配の一つの拠点となったところである。セミレーチエ地方での植民の展開と社会的矛盾の醸成，1916年のムスリム蜂起，1917年のロシア革命の進展については，既に論ずる機会があった[3]。ここでは，ロシア中央部での十月革命の衝撃をうけ，植民地に成立したソヴェト権力の社会的基盤とその政策，入植農民の行動と農民革命の性格を明らかにし，革命のハイライトを成す脱植民化の土地改革と政治闘争を跡付け，植民地の革命の構造と特性の把握を目指す。

この辺境植民地に於ける革命の構造と特性の問題は，1920年代のソ連で熱く論議されていた。辺境民族地域の党とソヴェト活動家にとって，脱植民化をめざす土地改革と民族問題は，鋭い政治的イッシューであった[4]。だが，1930年代以降，ロシア革命の「一体性」論のもとで，地域の革命の自立（律）性は否定され，1921—22年の土地改革も1917年10月にはじまる土地革命の連続ととられ，1921—22年，25—27年と二度に及ぶ中央アジアの土地改革も，中央ロシアの土地革命に似せて，ブルジョワ民主主義的とするか，社会主義的とするかの性格論議に専ら終始することになった[5]。研究における民

族主義への否定的態度と相俟って，脱植民化の要素が稀釈され，後景に追いやられることになったのである。戦後の西側では，冷戦の知的雰囲気のなかで，ソ連での民族自決の政治的形式性，虚飾性を問う一連の研究が出た。これらの研究では，辺境植民地の革命はロシア人移民＝入植者によって担われ，「ソヴェト化 sovietization」という新しい支配がもたらされ，1921—22年の土地改革が民族関係を鋭化させたことが強調されるが，植民地における土地改革の実態と意義に強い関心が向けられることはなかった[6]。日本では，1950年に的場氏が中央アジアの農業変革を先駆的に論究し，続けて，木村氏が，中央アジア革命史研究のなかで，土地問題と民族問題に係る一連の研究を発表してきた。だが，両氏ともトルケスタンの灌漑農業と棉作に主な関心を向け，この地域の第二次土地改革に大きな比重をさいた。従って，ステップ地域セミレーチエの土地改革とその政治闘争については，今後の課題として残されていたといえよう[7]。

さて，ソ連と欧米の研究にみられるように，辺境植民地の革命と土地改革に全的な肯定あるいは否定のアクセントをおくのではなく，本稿では，1916年ムスリム蜂起ではじまった中央アジアの革命を，具体的にセミレーチエ地方で検証し，辺境植民地の土地改革と政治闘争の意義を確認し，これをいわば未完の革命として位置づけることを課題とする。

注

1) В. О. Ключевский, Сочинения т. 1. М., 1987, с. 50–53. クリュチェフスキーのこの植民史観は，帝政ロシアの辺境異民族地域の支配を歴史的に正当化する論拠として援用された。См., Азиатская Россия. т. 1. издание Переселенческого Управления Главного Управления Землеустройства и Земледелия. Спб., 1914, с. v.

2) 田中克彦『草原と革命』恒文社，1971年（1984年復刊），同『草原の革命家たち』中公新書，1973年（1990年，増補改訂）。

3) 拙稿「帝政ロシア・セミレーチエ地方に於ける植民の展開—1867～1914年～」『北大史学』第29号（1989年8月），同「中央アジアに於けるムスリム蜂起と革命—セミレーチエ地方を中心に（1916—1917年）—」『北海道大学文学部紀要』38ノ3（通巻68号）1990年3月。

4) 1921年春の第10回共産党大会で，民族問題の副報告者を務めたГ. サファーロフは，

辺境地域のソヴェト権力の植民主義的性格を告発し，セミレーチエ州の原住民に土地に対する権利を保障せずには，辺境に於ける民族政策は問題とならないと主張していた。Десятый съезд РКП(б). Стенографический отчет. М, 1963, с. 193-4. 二年後の第12回党大会では，カザフ人革命家 T. P. ルィスクロフが，ロシア中央部では農地改革が実施されたが，多くの辺境では，それは行れず，カザフ人社会には何らの変革ももたらされなかったと発言し，辺境地域での土地改革の不徹底を批判していた。Двенадцатый съезд РКП(б). Стенографический отчет. М., 1968, с. 512-514.

5) В. П. Данилов, К итогам изучения истории советского крестьянства и колхозного строительства в СССР. «Вопросы истории», 1960, № 8, с. 42-43; Г. Ф. Дахшлейгер, социально-экономические преобразования в ауле и деревне Казахстана, Алма-Ата, 1965, с. 24-25; А. Е. Еренов, Ж. Х. Косанов, Ленинский декрет «О земле» и развитие советского земельного кодекса Казахской ССР. «Известия АН Казах. ССР», серия общественных наук, № 3, 1977, с. 24. 27.

6) W. Kolarz, *Russia and her Colonies.* London., 1953, pp. 7, 263; R. Pipes, *The Formation of the Soviet Union*, 1957 [revised. ed., 1964], Harvard U. P., p. 174; E. Allworth, ed., *Central Asia. A Century of Russian Rule*, London, 1967, pp. 240-241; 240-241; M. B. Olcott, *The Kazakhs.* Hoover Institution Press, 1987, pp. 158, 162.

7) 的場徳造「ソ連邦中央アジア灌漑農業地帯の土地改革」『農業総合研究』1950年3月臨時増刊号（所収『コルホーズの歴史と展開』1980年，お茶の水書房，218-9頁)。木村英亮「植民地における革命の構造—中央アジアにおける十月革命—」『比較文化研究』(東京大学教養部) 第6輯，1965年，195-6頁。同「モノカルチャ植民地の社会主義的改造—ソ連中央アジアの棉花栽培と農業変革—」『土地制度史学』第34号，1967年1月，26頁。木村氏はトルケスタン委員会とルィスクロフの政治活動を扱った論文で，何度か第一次土地改革へも言及している。だが，ムスリム・コミュニストの指導者としての彼の行動を，「地方民族主義」の偏向の枠内で把え，彼らの脱植民化の志向が十分に評価されない憾みが残る（「ソヴェト中央アジアにおける社会主義と民族主義，トルケスタン委員会とルィスクロフ」『史潮』第5号，1979年，11, 20, 21頁)。又，奥田氏は1920年代ソ連のフートルを扱った論文のなかで，トルケスタンの土地改革の特異性を考慮せずに，それを20年代のフートル清算の行政措置の一地方的事件として提示し，脱植民化を目指す土地改革の基本的性格を失念している。奥田　央「ロシアのフートルについて」(『ソ連農業の歴史と現在』木鐸社，1989年，所収) 14頁。

I. ソヴェト権力の樹立

トルケスタン地方では，二月革命以降，タシケントの労兵ソヴェトを中心に革命運動が展開していた。この担い手は，中央アジア鉄道とオレンブルグ＝タシケント鉄道の労働者とトルケスタン軍管区の守備隊兵士であった。前者は植民地開拓＝支配の基幹となる両鉄道の労働者であり，第一次ロシア革命でも，1917年に始まる革命でも辺境地域の労働運動を主導する勢力であった[1]。後者は，トルケスタンで兵役免除の原住ムスリムにかわって，専ら外来移住民から召集され，セミレーチエ出身兵（移民）の動向にみられるように，1917年にはレプシンスク七月事件，タシケント九月事など一連の兵擾を起こし，臨時政府のトルケスタン支配に脅威を与えていた[2]。

植民地トルケスタンに於けるロシア支配の拠点，タシケントでは，首都ペトログラードの武装蜂起とソヴェト権力樹立の報を受けて，10月28日から守備隊兵士と鉄道労働者を中心に武装蜂起が始った。11月1日には革命派が勝利した[3]。続いて，第三回トルケスタン地方ソヴェト大会（11月15～22日）が召集され，ソヴェト権力の樹立を承認し，ムスリム代表の権力参与を斥け，左派エス・エル，ボリシェヴィキ，マキシマリストから成る人民委員会議を選出した[4]。ロシア人主導のこの革命過程から排除＝疎外されたムスリム代表は，フェルガナ州コーカンド市に集結し，第四回トルケスタン地方ムスリム大会（11月26～29日）を開催した。大会で自治トルケスタン臨時政府（所謂「コーカンド自治」）の樹立が宣言され，翌18年2月19—20日に，タシケントから派遣された赤衛隊によって打倒されるまで，タシケントを中心とするソヴェト権力と対峙することになった[5]。ここには，辺境植民地に共通の革命過程の「並行性」が明瞭な政治的表現をえているのであるが，コーカンド自治政府の壊滅は，ソヴェト権力にとって由々しきバスマチの運動を誘発し，「フェルガナ問題」を生むことになる。

さて，トルケスタンの東南端に位置し，中国新疆省と接するセミレーチエ地方では，タシケントの労兵ソヴェト主導の，あるいはコーカンドのムスリム主導の権力樹立とも異なる，辺境の植民地社会に規定された独自の政治プロセスが現出した。ここでは，タシケントの緊迫した事態の知らせを受け

て，11月1日にセミレーチエ・コサック軍が要衝を制圧し，翌2日に当州に軍事独裁が布告された。

「1. ロシア全般，特にトルケスタンで，ボリシェヴィキの運動によって引き起こされた諸々の事件のため，また，セミレーチエが統治の中心，ペトログラードとタシケントから遠く引き離されているため，セミレーチエ・コサック軍は1917年11月2日から……（中略）……臨時政府の合法的権力とロシア中央部との連絡が再興されるまで，軍自体に於て全権力を掌握する。

2. ボリシェヴィキの運動が，タシケントからこのセミレーチエへ波及するのを警戒し，コサックは，州内で秩序を紊乱するいかなる行動も許さないと表明する。

3. 住民の無責任な集団行動は全て，どこから生じようと，コサックによって容赦なく鎮圧される。

4. コサックの行動は全て，一つののこと，即ち，祖国と我が地方を救済し，ロシアの主人たる憲法制定議会へ祖国を導くことに向けられる。

5. 軍を代表する軍評議会と軍政府（軍アタマンと軍庁）は，臨時政府代表と密に連絡をとり活動したし，活動し続ける。

6. 軍は，どのような秩序紊乱も許さないという点で，軍と社会の現存する全ての団体の全幅の支持をえていると確信し，憲法制定議会まで我が地方を導くことを支援する。　軍評議会及び軍政府　原文に相違なし」[6)]

この軍事独裁の政治的指導を執ったのは，臨時政府トルケスタン委員会の当州コミッサール，O. A. シュカプスキーと，タシケントから逃れてきた同委員会軍事コミッサール，B. Г. イヴァーノフであった[7)]。彼らは，M. トゥイヌィシュパエフやИ. ジャイナコフ Джайнаковらカザフ人のアラシュ・オルダ党の支持を取りつけ[8)]，さらに，協調派社会主義者が指導する州労兵農ソヴェトのタシケントの革命派ソヴェトによる権力奪取への反撥にも助けられ[9)]，軍事独裁を樹立したのである。この軍事独裁の社会的基盤は，辺境の特殊な軍事身分であるコサックと被抑圧ムスリムであった。彼らは，当州で11月12日と26日に行れた憲法制定議会選挙に統一選挙名簿を提出し闘った。セミレーチエのコサック軍評議会とアラシュ・オルダ党のこの共同統

一名簿には，219,832票（得票率52.8%）が投ぜられた。他方，革命派は独自の選挙名簿を提出できなかったが，州労兵ソヴェト，州農民ソヴェト，キルギス人勤労者組織《ブカラ》の統一選挙名簿は，167,793票（得票率40.3%）を得ていた[10]。セミレーチエでは，移民＝入植者の社会的行動に脅威を覚えたコサックとムスリムの社会的同盟のうえに，各地でのソヴェト権力樹立の衝撃を受けて，軍事独裁が成立したのである。しかし，入植ロシア人社会が，労兵農ソヴェトの選挙名簿へ投票したように，軍事独裁は入植民社会に強固な足場をもっていなかった。

植民地セミレーチエに成立したこの軍事独裁は，その11月2日の独裁宣言にみられるように，「ボリシェヴィキの運動」の名で示される革命の外からの浸透を防遏し，内からの醸成を抑止することに懸命となった。当州には戒厳令が布告され，州都ヴェルヌイ（現アルマ・アタ）の要衝にはコサック兵が配備され，街頭での民衆の集合を厳しく警戒した。州都の西，カスケラン駅の検問所では，帰郷するセミレーチエ出身兵の身辺と思想が取り調べられた[11]。さらに，タシケントの革命を逃れ，ヴェルヌイへ来た士官学校生徒から，ユンケル部隊を編成することが決定され[12]，アラシュ・オルダ派の下には，2千人のムスリム部隊が編成された[13]。このように革命の波及を防遏しつつ，自らの軍事力を補強し，軍事独裁は自らに脅威となる社会組織，とりわけ移民＝入植者を代表するソヴェトの解散に向った。12月26日に，州兵士ソヴェトの解散が命じられ，翌18年1月初めには，ヴェルヌイの労兵ソヴェトが解散された。この解散に反対した，ヴェルヌイの革命運動の指導者，オフチャーロフ К. В. Овчаров は逮捕され，州農民ソヴェト機関紙『農民新聞』で，軍事独裁を非難した編集者ベレゾーフスキー А. П. Березовский も逮捕され，新聞は発刊停止となった。両人とも秘かにコサック兵により殺害された[14]。18年1月2日から第二回州農民大会が開かれ，州農民ソヴェトを選出したが，軍政府はこの農民ソヴェトも解散し，その議長，グレーチュコ П. Д. Гречко を逮捕した[15]。このように，移民＝入植者を基盤とするソヴェトを解体しつつ，ムスリム住民とコサックの軍事独裁への統合が目指された。続けざまにカザフ＝キリギス，ウイグル＝ドゥンガンの州大会，コサ

ック軍の総会 круг が開催され，「権力簒奪者＝ボリシェヴィキ」と闘い，憲法制定議会のみを承認することが確認されていったのである[16]。

この軍事独裁は，ドンのカレーヂン軍，オレンブルグのドゥートフ軍へ期待をよせ，全ロシア的な反革命「南東同盟 Юго-Восточный союз」との連繋を強めていった[17]。だが，コサックと原住民の同盟に依拠する，この軍事独裁へは，入植ロシア人の強い不信と不安が醸し出されることになった。コサックと原住民が一緒になって，入植農民と都市の町民を皆殺しにしようとしているとの風説が拡ったのである[18]。だが，軍事独裁は，1916年ムスリム蜂起以来の鋭い民族的敵対と不信を解消する措置も，植民地の土地問題の有効な解決策も提示できなかった。州移民局長から臨時政府の下で，州土地委員会議長に就任したエス・エルのゴンチャローフスキー B. A. Гончаровский は，18年1月の州土地委員会の第二会議で，1916年ムスリム蜂起の事後処理としての原住民移転を継承・実施すると述べた[19]。2月初めに州土地委員会が採択した「郡土地委員会への指令書」は，当事者間の自発的貸借により土地問題の解決をはかることを指示したにすぎない[20]。しかし，旧来の措置の踏襲では最早，移民＝入植者も原住ムスリムも満足させることはできなかった。

セミレーチエのこの軍事独裁の存在を脅す動きは，植民地社会の外来移民のなかに窺われたが，まず何よりも入植農民のなかから強力に現れることになった。18年1月2日から10日までヴェルヌイで開かれた第二回州農民大会には，臨時政府トルケスタン委員会のメンバー，憲法制定議会へ選出された議員，さらにコサック代表らが駆けつけ，農民代表の説得と支持の取りつけに動いた。だが，大会はグレチュコ П. Д. Гречко，パーヴロフ П. Н. Павлов，カザコーフ Казаков ら後にボリシェヴィキとなる農民に率られ，賛成131，反対15，棄権7の圧倒的多数で，ロシア中央部ではソヴェトに権力が移ったことを確認し，「我々，中央から切り離されたセミレーチエ人は，自由，公正な秩序 порядок，その他の革命の成果を強化するために闘う同志，農民に公然たる支持を表明する」と述べ，ロシア中央部のソヴェト権力支持の立場を打ち出したのである[21]。大会は軍事独裁の「南東同盟」への志

向を拒け，中央ロシアのソヴェト権力への合流をめざし，大会指導部から最初のボリシェヴィキ・グループを形成したのである[22]。

この農民大会では帰郷した出征兵士の姿も多くみられたが，各地で革命の息吹に触れ，故郷へ戻る兵士の流れは，セミレーチエにも及んだ。特に，タシケントで動員解除となり，故郷の入植村落へ向う兵士は軍政府に大きな脅威となった[23]。軍政府を支えるコサックのなかにも，革命の影響は浸透していた。18年1月末に，外地ペルシャから第二セミレーチエ・コサック連隊が帰還したが，彼らは任地で厭戦気分にひたり，動員解除を求め，帰途では鉄道労働者や各地のソヴェトの影響を受けていた。2月15日に，このコサック連隊の兵営近く，ヴェルヌイの旧墓地広場で大衆集会が行れた。軍政府は集会を解散させ，逮捕者が出たが，その中に連隊兵士もいたことから，事態は一挙に緊迫した[24]。コサック連隊が革命側に移り，軍事独裁の指導者，シュカプスキーもイヴァーノフもヴェルヌイから遁走したのである[25]。3月2日に，再び大衆集会が催され，市住民，労働者，帰郷兵士に加えて，第二セミレーチエ連隊も参加し，ソヴェト権力樹立の決議が採択された。このセミレーチエ連隊から編成された戦闘部隊が，市の要衝を制圧し，翌3日には，ヴェルヌイの武裁蜂起は勝利したのである[26]。

ヴェルヌイでの政変，ソヴェト権力樹立とあい前後して，セミレーチエ州の各地でソヴェト権力が形成されている。ピシュペク（現フルンゼ）市では，17年11月末より地方権力は機能麻痺の状態に陥っていたが，12月31日の樫園での大衆集会，翌1月1日の労兵ソヴェト会議，続いて2月の郡ソヴェト大会で，ソヴェト権力の樹立が承認されていった[27]。3～4月には，ヂャルケント，コパル，レプシンスク郡でもソヴェト権力が樹立された[28]。1916年のムスリム蜂起後，殆んど全てのキルギス人の土地が入植農民に占拠されていたプルジェヴァリスク郡では，入植者が18年1月に地方会議 земское собрание を組織し，この地方を支配した。州郡ヴェルヌイにソヴェト権力が樹立されると，この地方会議は郡ソヴェトと改称し存続した。6月26日に郡市プルジェヴァリスクにパーヴロフの指揮する赤衛隊と州ソヴェト代表が到着し，7月1日に郡ソヴェトが新たに召集され，地方権力は漸くソヴェト的形態をと

った[29]。

辺境植民地セミレーチエでは，ヴェルヌイ，ピシュペクのように民衆の直接的結集—大衆集会を契機に，あるいは，他の地方のように地方権力がソヴェトを中心に改編されることによって，ソヴェト権力が形成された。だが，このソヴェト権力の基盤が何よりも，移民＝入植者であったことを，まず確認しておかねばならない。ヨーロッパ・ロシアやシベリアからの農民入植者，入植地を求めつつ都市に滞留し町人身分に転籍した手工業者，雑業従事者，入植地の営農に気を引かれて帰郷したセミレーチエ出身兵，戦争のなかで革命の息吹きにふれたコサック兵などによって，ソヴェト権力は担われることになったのである。確かに，原住ムスリムの代表，あるいは活動家が革命過程に参加したことを示す，個々の貴重な例がある[30]。だが，ソヴェト権力の社会的基盤の中核は，入植農民を結集した農民ソヴェトであった。州農民ソヴェトは，既に17年12月20日に軍事独裁に抗議しつつ，「25万農民の見解の代表者」と主張していたが[31]，この25万とは当州の入植農民の数であり，100万余の原住ムスリムを考慮した数ではなかった。ヴェルヌイ武裁蜂起の後，3月4日の晩に設置された州軍事革命委員会には，その23人の構成員中，農民ソヴェトから最大の7人が送りこまれている[32]。入植農民を結集した州農民大会と，そこで選出された州農民ソヴェトが革命過程を牽引し，3月4日以降，農民ソヴェトは他の諸組織から各2名の代表を補い，辺境植民地のソヴェト権力の社会的中核をなしたのである[33]。

ついで，植民地のこのソヴェト権力が，ロシア中央部，シベリア，さらに，トルケスタンに於けるロシア革命の拠点，タシケントへの帰一を志向していたことに注目しなけなばならない。ピシュペクでは，18年1月1日のソヴェト会議で，エス・エルの議長チトーフ M. Титов に代って，ボリシェヴィキのシュヴェツ・バザルスキー Г. И. Швец-Базарский を選出し，ロシア革命の拠点，ペトログラードとタシケントの中央ソヴェト権力に合流すると決議した[34]。だが，市会ではシベリア自治政府への合同を求める動きがあり，結局，1月20～21日に市民の賛否が問われた。この市民投票の結果は，シベリアへの合邦支持21票に対し，ペトログラードとタシケント支持は277

票，残り3027票は憲法制定定議会まで未決とするものであった[35]。ピシュペク住民の，中央の帰属先をめぐる揺れ動きは，同時期の第二回州農民大会でもみられた。大会はセミレーチエ州をシベリアへ併合することを憲法制定議会に求めると決定しつつ，「今後，この問題が憲法制定議会で解決されるまで，我々は中央とタシケントからの命令を執行する」と留保・確認したのである[36]。自ら依存し帰属する方位を，ペトログラード＝タシケントとするか，シベリアとするか，あるいは憲法制定議会の判断に委ねるかは別として，辺境植民地での入植者＝移民の中央への帰一志向は強力であった。中央の指令のうち「地方の諸条件に合致するとみなされるもののみ執行される」ことを求めた代議員の提案を大会は厳しく拒けているのである[37]。大会でソヴェト権力支持を打ち出した決議の文言，「ロシアではソヴェトがある，我々もソヴェトを支持する！　ロシアでは真実 правда がどこにあるか，より一層明瞭である」に[38]，「我々，中央から引き離されているセミレーチエ人」の中央志向の熱い想いが秘められている。

結局，セミレーチエの入植民社会は，辺境のコサックと異民族を結集した「南東同盟」を拒否し，彼らを移民として送り出した地域と社会の革命への帰一を志向したのである。シベリア「自治政府」が，中央からの自立を強めるに応じて，入植民社会はペトログラードとタシケントへの方位を明確にし，そこに植民地に於ける自らの地位の保持と強化を求めたのである。「権力をソヴェトへ」のスローガンの下で，17年10月から翌年夏までロシアの各地に生れたソヴェト権力は，「地方主義 местничество」の名で呼ばれる自立性を発揮したが，辺境植民地セミレーチエのソヴェト権力は逆の中央への強い志向＝帰属を示したのである。18年5月末にヴェルヌイで開かれたソヴェト会議は，セミレーチエ州各地の代表を集め，州全体のソヴェト執行委員会を選出し，中央政府と革命の指導者レーニンへ宛て，「自由なロシアの русская 連邦社会主義共和国の栄光」のため活動している同志への支持を表明していた[39]。ここには，ロシアに住む非ロシア人を含めた人々一般ならざる，ロシア人移民＝入植者を社会的基盤とするソヴェト権力の中央への強い帰属志向が潜んでいる。

植民地に成立したこのソヴェト権力は，原住ムスリムに対して新しい政策を打ち出し，土地問題への対処をせまられていくことになる。州都ヴェルヌイでソヴェト権力の樹立が宣言されて直後の3月7日に，州軍事革命委員会は民族問題への取り組み＝原住ムスリム対策に着手している。この委員会で，首都ペトログラードの民族問題コミッサールから1916年蜂起の結果生じたキルギス人への抑圧に対する措置について照会があったことが伝えられ，抑圧・迫害防止のあらゆる措置がとられていると返電することが確認された。次いで，会議はトカシュ・ボキンの提案をうけて，アラシュ・オルダ党州委員会の活動を調査する委員会の設置を決め，原住民に「権力は勤労人民の手にあり，今迄のような抑圧はもはや存在しなくなるであろう。勤労人民は民族の差異なく一つの核に合流し，手を取り合い長く待望した福祉благоを創造せねばならない」と宣布すると確認した[40]。この3月7日の会議で三つの基本点が指摘されたといえよう。まず，1916年蜂起の結果生じたムスリム抑圧への対策であり，次いで，民族主義者の組織への対応であり，第三に，民族の差異なく「勤労者」として原住ムスリムをソヴェト権力へ統合する方針である。これらの基本点は，植民地セミレーチエのソヴェト権力が今後一貫して民族政策の分野で対応を迫られる論題となった。第一の点では，第二回州農民大会が，1916年蜂起をツァーリ政府の政策によって引き起こされたと認めつつ，民族解放の性格を評価できなかったように[41]，ソヴェト権力の対応も飢餓と困窮からのムスリムの救済・救恤の閾を越えるものではなかった[42]。従って，1916年蜂起の結果強まったムスリムへの抑圧はこの後も尾を引くことになる。第二の点では，4月11日にアラシュ・オルダの組織一掃が決定され，民族主義組織の解散が求められていく。この解散決定は，原住民社会のなかに階級分化の方針をもちこみ，「勤労キルギス人」の統合をはかる第三の論点とも結びついている。4月11日の決定は，「富裕なキルギス人」をアラシュ組織の担い手と同定し，「勤労キルギス人の利益を守らない」彼らからの畜群の没収，税の徴収，組織の解散を求めたのである[43]。さらに州ソヴェト執行委員会の下に民族部が設置され，ロシア語とともに原住民のトュルク語も公用語と認定されていくが[44]，総じて，民族政策は民族

の同権と勤労者の利益擁護を唱えつつ，都市と入植村落の外来移民を社会的基盤とするソヴェト権力への参加を求める親和 сближение 政策であった。

ソヴェト権力のもう一つの眼目である土地政策は，3月22日に植民政策を担ってきた移民局の廃止を，州人民委員会議が決定することから始った[45]。同日の州農業委員部の決定は，土地と水を「土地なしの勤労住民」に渡し，「土地を勤労者へ」の原則で土地改革を行うと述べた[46]。州ソヴェトが4月に採択した住民への呼びかけ，「同志諸君！」では，中央ロシアで採択された「土地社会化基本法」に基づいて，州全体で「臨時の消費＝勤労規準」を作成し，早急に土地問題の解決にとりかかることを求めていた[47]。これらの文書には原住ムスリムの土地に関する言及は一切なく，「土地を勤労者へ」の基本方針が強調されていた。6月に入るとこの基本方針は辺境植民地の実態のなかで具体化され，私的所有者，非勤労経営の土地とともに，移民局の管理下にあった土地，カザフ・キルギス人の許から長期借地されている土地，コサック軍属の年金給与地などを収用し，「均等＝勤労用益」の下に入ることが指示された[48]。3月から6月にかけて，植民地セミレーチエのソヴェト権力は，植民行政を推進してきた旧来の移民局を廃止し，「土地を勤労者へ」の原則で新しい土地政策に向った。だが，これは，植民地の富裕な非勤労経営，特権的土地所有者コサックから土地を収用するとともに，被支配民族カザフ，キルギス人の許から入植者が長期借地している土地の収用へも道を開き，移民＝入植者に消費＝勤労規準で農地を分配する方針であった。これは，中央部ロシアの農民革命の範型の辺境植民地への導入であり，当州の移民＝入植者が革命のなかでたえず求めてきた要求の実現でもあった[49]。

注

1) К. Е. Житов, Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Туркестане, «Исторические записки», т. 61, 1957, с. 91–2.
2) Д. И. Сойфер, Солдатские массы в борьбе за победу Воликой Октябрьской социалистической революции в Тукестане. (март-ноябрь 1917 г.). «Исторические записки», т. 64, 1959, с. 48–9. 拙稿「中央アジアに於けるムスリム蜂起と革命—セミレーチエ地方を中心に (1916—1917年)—」100頁。
3) 臨時政府トルケスタン委員会議長の著名なオリエンタリストで，メンシェヴィキのナ

リーフキン B. П. Наливкин は，逮捕の後，釈放されたが，失意のうちに妻の墓前で自殺を遂げた。J. Castagné, Le Turkestan depuis la révolution russe (1917–1921). *Revue du monde musulman*. no. L (june 1922), pp. 30–31.

4) «Победа Октябрьской революции в Узбекстане», сборник документов, т. 1, Ташкент, 1963. № 641, с. 576–7.

5) «Победа Октябрьской революции в Узбекстане», сборник. документов, т. II, Ташкент, 1972, № 8, с. 27; № 201, с. 149; № 202, с. 150; прим. 2. с. 535–6. この大会はトルケスタンの自治を宣言し，セミレーチエ州のムスリム指導者トゥイヌィシュパエフ M. Тынышпаев を首班とする「自治トルケスタン Туркестани Мухториат」臨時政府を選出したのである。Г. Сафаров, Колониальная революция, М., 1921, с. 71–72.

6) «1917 год в Казахстане», документы и материалы, Алма-Ата, 1977, № 166, с. 191–2.

7) タシケントのソヴェト権力は，12月6日に，この二人の解任・逮捕を命じている。«Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Туркестане», сборник документов, Ташкент, 1947, №№ 132–133, с. 119–120.

8) アラシュ・オルダ党はオレンブルグでドゥートフのコサック軍に支援されて，12月にカザフ人の自治を宣言し，コサック反革命と共同行動をとった。セミレーチエでは，コーカンド自治政府の首班トゥイヌイシュパェフが，18年初めに当州に戻り活動している。С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советский переворот в Семиречье. «Большевик Казахстана», 1936, № 6, сс. 54. 59. ジャイナコフはソヴェト権力樹立の際に，シュカプスキー，イヴァーノフと共に逃亡することになる。«Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане. 1917–1918 гг», сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1957, с. 22.

9) «Триумфальное шествие советской власти», ч. II. документы и материалы. М., 1963, № 317, с. 275.

10) С. Н. Покровский, Победа Советской власти в Семиречье. Алла-Ата, 1961, с. 104–5. 選挙管理委員会は，ムスリムとコサックが積極的に投票したと指摘している。«Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане. 1917–1918 гг.», № 132, сс. 162, 165.

11) С. Браинйн, Ш. Шафиро, Советский переворот…, с. 54.

12) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане и образование Казахской АССР», сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1947, № 24, с. 72.

13) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советский переворот…, с. 54.

14) И. Русаков, Борьба за советскую власть в Семиречье. «Большевик Казахстана», 1950, № 8, с. 37–38. С. Н. Покровский, Указ, соч., с. 106–7.

この二人は植民地セミレーチエの革命を地域と民衆に即して理解するためには非常に重要である。アレクサンドル・ペトローヴィチ・ベレゾーフスキーは大アルマ・アタ兵村のコサック身分に生れ，ヴェルヌイ市で移民庁通辞として勤務した。青年として，この地で第一次ロシア革命を体験し，「ロシアの現体制の打倒」を目指す活動の廉で，1907年5月10日に彼の逮捕，及び家宅捜索が命じられ，彼は全ての身分権を剝奪され，終身流刑の判決をうけた。帝政打倒後，十年の流刑から戻り，植民地社会のなかで再び革命運動に加ったのである。«Революционное движение в Казахстане в 1905–1907 годах», сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1955, № 217, с. 287; С. Н. Покровский, Указ. соч., с. 74–5; «1917 год в Казахстане», № 184, с. 212–3. カルプ・ヴァシリエヴィチ・オフチャーロフは，ヴェルヌイの鍛冶職人で，1917年には市の町人参事会長として活躍した。彼は，土地を志向しつつも入植できず，町人身分に転籍しつつ滞留した植民地の都市住民のなかで，革命運動を指導したのである。С. Н. Покровский, Указ. соч., с. 75; «1917 год в Казахстане», № 148, с. 178; № 181, с. 211. 二人とも軍事独裁下で逮捕され，12月17日，あるいは19日の夜に銃殺された。«Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане. 1917–1918 гг.», № 152, с. 179; Материалы объединенной научной сессии, посвященной истории Средней Азии и Казахстана эпохи социализма, Ама-Ата, 1958, с. 168. この二人に，さらに，17年7月のレプシンスク兵擾事件を指導した，ロストフからの移民，З. К. ヂェグチチャリヨフ，1916年ムスリム蜂起で逮捕され，後にボリシェヴィキとして18年末にアラシュ・オルダ派に殺されたカザフ人トカシュ・ボキンを加えて，四人の活動家は，セミレーチエの革命の理解にとってキー的人物である。彼らの生れ，育ち，社会的活動を詳さに明らかにすることは，革命における植民地民衆の息吹き，脈拍を感知するために欠かせない作業であろう。しかし，残念ながら，今のところ彼らの存在とその断片的言及にとどまざるをえない。

15) И. Русаков. Борьба за советскую власть…, с. 38; С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советский переворот, с. 62.

16) Там же, с. 62; Г. Трофимов, Из прошлого компартии в Джетысу. «Коммунистическая мысль», 1927, кн. 3, Ташкент, с. 275–6.

17) 軍政府は11月25日に正式に「南東同盟」に加った。С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советский переворот…, с. 53; С. Н. Покровский, Указ. соч., с. 104.

18) Г. Трофимов, Из промшлого компартии…, с. 276.

19) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советекий переворот…, с. 60.

20) С. Н. Покровский, Из истории второго Семиреченокого областного крестьянского съезда. «Вестник Академии Наук Казах. ССР», 1955, № 9, с. 6; его же, Указ. соч., с. 113. 州土地委員会は，17年9月18日の決定で，住民，とりわけコサックとムスリム原住民に「賢慮と友好 мудрость и миролюбие」を求

め，「広範な土地貸し出し」によって土地問題の解決をはかり，「どのような強制措置も示威」も行使しないと表明していた。Н. В. Кутнякова, С. С. Абубакирова, Деятельность земельных комитетов Семмречья в 1917 г. «Известия АН Казах. ССР», сесеия общественных наук, № 2, 1988, с. 35–6. 二月初めの「郡土地委員会の指令書」も，この方針を引き継ぐものであった。

21) Г. Трофимов, Из прошлого компартии…, с. 276; С. Н. Покровский, Из истории второго…, с. 8–9; «Триумфальное шествие советской власти», документы и материалы, ч. II, М., 1963, № 341, с. 298.

22) グレチュコ，パーヴロフ，カザコーフは，それぞれプルジェヴァリスク，トクマク，コパル郡の農民ソヴェトのメンバーであった。彼らにヴェルヌイの活動家を加えて，ボリシェヴィキーの最初の非合法組織が，植民地セミレーチエに生れたのである。Г. Трофимов, Из прошлого компартии…, с. 277.

23) セミレーチエ出身兵の多い第一，第二シベリア狙撃兵連隊は，タシケントの武装蜂起とソヴェト権力の樹立に大きな役割を果し，帰郷の途についていた。Д. И. Сойфер, солдатские массы…, с. 77–81; История Киргизии, т. II. Фрунзе, 1956, с. 42–43.

24) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советский переворот…, с. 64–65.

25) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Туркестане», сб. документов, Ташкент, 1747, № 149, с. 130. シュカプスキーは，ヴェルヌイ蜂起の3日後に，市から60キロ離れたミハイロフスコエ村の製粉所で農民に捕えられた。«В огне революции», Алма-Ата, 1957, с. 234.

26) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Советский переворот…, с. 65–6; И. Русаков, Борьба за советскую власть…, с. 39.

27) «Победа Октябрьской революции в Киргизии», сборник документов. 1917–1918. Фрунзе, 1977, док. №№ 126–7, 149–155.

28) С. Н. Покровский, Указ. соч., с. 126–7.

29) А. Г. Зима, К вопросу об установлении советской власти в Киргизии, «Материалы объединенной научной сессии…», с. 131; История Киргизии, т. II, с. 48–9; «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии», док. № 87, с. 91–2; прим. 21, с. 372–3; «Победа Октябрьской революции в Киргизии», № 184, с. 205–6; № 190, с. 210; № 192, с. 212; № 202, с. 219–220. прим. 36, с. 351.

30) 第二回州農民大会には原住ムスリムの村落アウルからも40人の代表が加わり，カザフ人トカシュ・ボキンも原住民を代表して挨拶している。また，3月4日に組織された州軍事革命委員会にトカシュ・ボキンら三人のカザフ人代表も入っている。«В огне революции», с. 235, 243; С. Н. Покровский, Из истории второго Семиреченского…, с. 7.

31) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане», №. 152, с. 179. 1917年にトルケスタンの各地で形成された農民ソヴェトは，ムスリム代表の参加を求めたが，基本的には外来入植農民を主体にしていた。第一回トルケスタン地方農民大会で，ウズベク農民は「我がシャリアートは他人の所有権の侵害を許さない，何故なら，我が神聖なシャリアートは強制収用を厳しく禁じているからである」とのべ，大会参加を拒んでいる。Е. Зелькина, Очерки по аграрному вопросу в Средней Азии., М., 1930, с. 84.

32) «В огне революции», с. 235.

33) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Туркестане», № 152, с. 133.

34) «Победа Октябрьской революции в Киргизии», № 127, с. 154–5.

35) «Великая Октябрьскя соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», документы и материалы, Фрунзе, 1957, № 32, с. 52; № 37, с. 55–56.

36) Г. Сафаров, Колониальная революция, с. 77.

37) С. Н. Покровский, Из истории второго Семиреченского областного крестьянского съезда, с. 8.

38) Г. Трофимов, Из прошлого компартии…, с. 276.

39) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане», № 227, с. 240. 史料編者は "русская" を "российская" に訂正して収録している。しかし，辺境植民地で非ロシア系異民族の民衆が圧倒的多数を成し，そこで支配民族の歴史を負う革命の担い手＝移民入植者が，自らの革命を "русская" とするか，"российская" と形容するかは，革命主体の意識に係る重大な問題である。

40) Там же, № 250, с. 270.

41) С. Н. Покровский, Из истории второго…, с. 8–9.

42) トカシュ・ボキンのトクマク地区での飢えたキルギス人の救済活動を参照せよ。«Победа Октябрьской революции в Киргизии», № 251, с. 271.

43) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане и образование Казахской АССР», сборник документальных материлов, Алма-Ата, 1947, № 62, с. 108–109.

44) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане 1917–1918 гг.» с. 389; «История Киргизии», т. II, с. 74.

45) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане. 1917–1918 гг.» с. 389.

46) «Победа Октябрьской революции в Киргизии», № 245, с. 264–5. この方針に基づいて3月25日に農業人民委員補は，各郡に土地改革のための委員会を設置し，移民局をはじめ旧農務省の技師のソヴェト権力への協力を呼びかけた。«Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане 1917–1918 гг.» № 284, с. 318; «Победа Октябрьской революции в Киргизии», № 246, с. 265–6.

47) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 85, с. 90–92.

48) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане. 1917–1918 гг.» № 340, с. 363–4; № 341, с. 364. 18年7月16日には，州農業人民委員でボリシェヴィキのザトゥイルニコフ H. H. Затылников は，土地改革の「基本」として「消費＝勤労規準」を採用することを指示している。«Победа Великой Октябрьской революции в Киргизии», № 272, с. 292.

49) 17年夏のセミレーチエ州第一回農民大会でも，18年1月初めの第二回大会でも，全ての土地を勤労農民の手に移すことが決議されていた。拙稿「中央アジアに於けるムスリム蜂起と革命」98頁。С. Н. Покровский, Указ. соч., с. 111.

II. 一党制の形成

中央アジアの植民地セミレーチエに成立したソヴェト権力は，辺境コサック身分に敵対し，カザフ，キルギスの原住ムスリムを疎外する，移民入植者の社会に依拠していた。T. ルィスクロフは，セミレーチエの初期ソヴェト権力は移民の「クラーク分子」と旧帝政官僚に汚染され，原住民のソヴェトへの参加を阻げようとしたと指摘している[1]。ヴェルヌイでのソヴェト権力樹立後，近郊の兵村からコサックが原住民を従えて市を包囲する行動に出た。農業に従事する市民は，市外の農作業に赴けず，市への給水も止められた。この州都包囲は，結局，ピシュペク，トクマク地方の入植農から編成された義勇隊の支援をえて破られたが[2]，ソヴェト権力の樹立は，同時に，植民社会の事実上の内戦の始まりであった。内戦へ突入するこの状況で，セミレーチエのソヴェト権力は二つの革命政党に担われていた。コサックの包囲を破って，5月25—26日に各郡からの代表を集めて，ヴェルヌイでソヴェト会議が開かれた。ここで，21人から成る州ソヴェト執行委員会が選出されたが，その党派構成はボリシェヴィキ19人，左派エス・エル2人で[3]，議長はブィコーフ H. Быков であった[4]。この二つの党派は，ソヴェト権力の与党として，又植民社会の二つの瞳として，そこに根をはりつつ，その矛盾し苦悩する表情を体現していくことになる。

植民地セミレーチエで，自称，他称を含め個々のボリシェヴィキは既に1917年の革命過程で現れ，体制への脅威となっていたが，彼らが組織的結集をとげるのは，ソヴェト権力樹立の後を追ってのことである。当州で最初の

ボリシェヴィキの組織的結集は，18年の3月10日である。この日，ヴェルヌイで社会民主党員の集会がもたれ，ボリシェヴィキの綱領が説明され，臨時の幹事会が選出されている[5]。ピシュペク市では，3月31日に組織ビューローがつくられ，4月2日にソヴェトの建物で最初の組織集会が開かれ，自ら共産党に属するとみなすソヴェト代議員から党組織が形成された[6]。プルジェヴァリスクでは，7月に郡ソヴェトで綱領と規約が説明され，共産党組織をつくることが決定されている[7]。共産党の組織形成は，ヂャルケントで12月，トクマクで翌19年1月末，ナルィンで2月末とさらに遅れ，内戦の場となったレプシンスクでは，それが終了した1920年のことであった[8]。

他方，左派エス・エルは，ブレスト講和を機に党中央委員会が示した共産党とのブロック解消の方針と異なり，ソヴェト権力のために共産党と協同して活動すると表明した[9]。その後も，党中央から独自の方針をとり，18年5月末から秋に，主に入植農民を中心に大きく組織的結集をとげていった。5～6月に，ピシュペク市とヴェルヌイ郡で，当州の左派エス・エルの指導者モルチャーノフ Ю. Молчанов によって，多くの党細胞が組織されている。ピシュペク市では，左派エス・エルの党員は8月末の220人から，11月1日に700人，11月半ばに1200人と急激に増大した[10]。人口2万5千の当市にとって，この数は大きく，その組織率は非常に高い。ヴェルヌイでは，左派エス・エルは600人の党員を擁し，郡ソヴェト執行委員会では7人の共産党員に対して，13人の多数が左派エス・エルであった[11]。プルジェヴァリスク郡では，「左派エス・エル党は，当初，〔共産党〕より強力であった。……あらゆる手段を講じて，我々に対抗し，十分な勢力を有し，自らの煽動を広く行い，大衆のなかにより多くの活動家を送った。これにより〔共産〕党の細胞を壊滅させ，我々の活動を，一部，無に帰せた」と，当郡の代表はトルケスタン共産党第三回大会（19年6月）で述べていた[12]。中央部ロシアでは，18年春～夏にソヴェトで大きな勢力をもっていた革命党の左派エス・エルが，7月モスクワ事件以降，急速に分裂・解体していくが，植民地トルケスタン，そしてその一州セミレーチエでは彼らは増勢し，共産党と拮抗する政党として現れていたのである。

この二つの革命政党は，ともに植民地のヨーロッパ系移民＝入植者を社会的基盤としていたが，内戦へ突入しトルケスタンがロシアから切り離され，経済的困難を深刻化させるなかで，具体的政策と個々の政務の配分をめぐり，対立・抗争を鋭化させていった。農業政策では，貧農委員会を設置し，穀物の強制的調達を目指すボリシェヴィキに，左派エス・エルは反対し，結局，セミレーチエ州をはじめトルケスタンには，貧農委員会は組織されなかった[13]。民族問題では，原住民のソヴェト権力への参加を主張し，そのために活動するボリシェヴィキに，左派エス・エルは厳しい警戒の念を抱き，反撥した。左派エス・エルは，ヴェルヌイで州民族問題コミッサールとして活動するカザフ人，トカシュ・ボキンに厳しい批判を行った。ピシュペク市では，1916年ムスリム蜂起で中国へ逃れ再び戻ってきた貧しい原住民を組織し，彼らの間で信望をえて，郡民族コミッサールとして活動していたタタール人，フスヌッラ・ハサーノフ Хусунулла Хасанов も，左派エス・エルの告発をうけ，10月に彼を含め三人のボリシェヴィキの民族問題コミッサールが逮捕されるに至った。彼ら三人は，やがて，12月にベロヴォドスコエ村を中心とする入植農民の蜂起のなかで殺害される[14]。植民地のソヴェト権力の政策の根幹を成す，これら農業，民族問題での両与党の対立に加え，七月後半にタシケントからセミレーチエへ，非常大権コミッサールとして左派エス・エルのチェゴダーエフ П. Чегодаев が派遣されて来た。彼は当州の左派エス・エルの組織を大きく進め，州ソヴェト執行委員会議長へ就任するが，共産党からの強い反発にあった。結局，彼は解任，再任を繰りかえし，両党の対立を鋭化させ，秋には同州を去らねばならなかった[15]。

二つのソヴェト与党の対立のこのような先鋭化は，トルケスタン全体でも進行し，18年秋にソヴェト権力は危機的様相を呈した。タシケントで開かれた第六回トルケスタン地方ソヴェト大会（18年10月5～14日）は，共産党員—49名，左派エス・エル—25名，計74名の中央執行委員会を選出したが，政府（人民委員会議）のポスト配分をめぐり，両党は厳しく対立した。比例配分を求める共産党に対し，共産党との対等配分を求める左派エス・エルは，人民委員会議への参加を拒み，政府への自党の責任を解くと表明した

のである[16]。左派エス・エルの人民委員会議への参加拒否にあい，トルケスタンのソヴェト権力は，危機に瀕したのである。

だが，この権力危機の進行と同時に，その危機の克服をめざす両党合同への動きが現れてきたのである。第六回トルケスタン地方ソヴェト大会と同時に開かれた第一回セミレーチエ州ソヴェト大会は，一転して両党の合同に向けての急激な動きを示したのである。大会の代議員構成は専ら農民的で，左派エス・エルが最初は大会を制したが，共産党も農民の利益擁護を訴え，無党派農民は共産党の支持に動いた。このような流動的状況の下で，大会の左派エス・エルのフラクションは，10月15日に次のような決議を提出し採択された。

「左派エス・エル党と社会民主主義者ボリシェヴィキの綱領が，土地社会化とコミューンの実現という主要な点で一致していることが明らかとなった。左派エス・エルのフラクションは，統一が力であり，同志ボリシェヴィキと共に同一の目的をめざしながら，我々は別々より共同する方がはるかに大きな事業を成就できると認識し，個々の党員に自由な選択に委ねつつ，ボリシェヴィキの党に合同することを決定した。」[17]

大会で左派エス・エルと共産党の合同が決定されたでのある。大会では，さらに「土地はそこで働くもの，それを個人の力で耕すものへのみ」渡すという勤労原則に従って，土地改革を実施することを州農業委員部へ求めることを確認している[18]。セミレーチエ州の二つの革命与党は，ソヴェト大会の最中に，入植農民の利害の擁護を確認し，両党の目標が一致していると意識して，合同へ向けて動き出し，「ロシアの русская 民主主義勢力によって始められた生活の社会主義建設」を最後まで完遂すると表明したのである[19]。

これ以降，当州の各郡で左派エス・エル党の解散と共産党への合同が進行し，この合同過程は19年春に完了する。ピシュペク郡は左派エス・エルが同州で最大かつ最強の勢力をもち，第一回州ソヴェト大会には，ボリシェヴィキの11人の代議員をはるかに上廻る23人を送っていた。ここでも両党の合同は急速に進行した。10月21日に郡ソヴェトが両党の合同決定を歓迎するとのべ，1カ月後の11月21日には，郡ソヴェト執行委員会が左派エス・

エルの解党を承認したのである[20]。ヴェルヌイ郡では，10月25日に郡ソヴェト議長でボリシェヴィキのヴィノグラードフ П. М. Виноградов が，両党の合同の意向を伝え，ヴェルヌイの左派エス・エルは翌年2月19日に，「党派的反目はソヴェト権力の公然，隠然たる敵に手をかすのみである。彼らはこれを利用して悪辣な煽動と反革命の言動をなすための土壌をつくっている」と表明し，自らの党組織を解散した[21]。左派エス・エルが強力であったトクマク郡，プルジェヴァリスク郡でも，19年春までに，同党組織が解散されている[22]。このようにして，セミレーチエ州では，流動的な党派性の現れる地方ソヴェトで，両党フラクションの合同が表明され，一挙に左派エス・エルの解散と共産党との合同へ進んでいった。

セミレーチエ地方から始ったこの合同の動きに促迫され，また，19年1月の軍事コミッサール，オーシポフ К. П. Осипов のクーデター未遂で頂点に達したタシケントのソヴェト権力の危機のなかで[23]，トルケスタン地方全体が大きく両党の合同へと向った。18年秋までの，植民社会を基盤とする二つのソヴェト与党の関係鋭化は，両党の合同へと反転したのである。19年3月の第七回トルケスタン地方ソヴェト大会は，この合同を政治的に演出する場となった。大会初日に，トルケスタン共産党中央委員会議長のソーリキン А. Ф. Солькин は，両党合同の方針を歓迎し，左派エス・エル党の指導者ウスペンスキー К. Я. Успенский は，次のように述べた。

「問題は新しいものではない。二つの党に関する，即ち，プロレタリアートの二つの陣営，即ち，二つの党への分裂に関するこの問題は，ことあるごとに我々を苦しめてきた。党派的な意見の相違，争論，そしてありとあらゆる些事などが，党派間の敵対をさらに一層あおっていた。これらの肖像が（オーシポフのクーデターのとき殺害された共産主義者を指しつつ―引用者），最早このように活動してはならない，そのような状態がこれ以上つづいてはならないと証言している。というのは，これはただ反革命を利するのみだからである。そこで，我々，社会主義者にして革命家，左派は，プロレタリアのこれ以上の分裂は無意味で犯罪的であるとの結論に達した。……というのは，現情勢では綱領と戦術はコミュニストと少しも異

ならず，結局，我が党はプロレタリアートと極貧の勤労農民の独裁を支持しているからである。これらの判断から，エス・エルのタシケント組織全てと党中央委員会の多数派は，共産主義者＝ボリシェヴィキの党と合同することを決定した。」[24]

同じ三月に開かれたセミレーチエ州の第二回ソヴェト大会で，この合同過程から排除された左派エス・エルは，最後の抵抗を行った。彼らはソヴェト権力の「人民性 народность」と「無党派性」を求め，党派の権力への介入，農業集団化やコミューンの形成，原住ムスリムのソヴェトへの参加誘引策を非難したのである[25]。これは，入植農民の政治的雰囲気を一定程度，反映するものであったが，しかし，これを最後に，左派エス・エルは，植民地セミレーチエの政治から姿を消すことになった。

このようにソヴェトを基盤に形成され，植民社会に同じく根をもつ左派エス・エルをも吸収・合併して，植民地の単一の独占的な政治的担い手となった共産党には，いくつかの重要な特徴があった。まず第一に，ロシア中央部のモスクワや，トルケスタンの革命の拠点タシケントからの組織的自立性が指摘される。州都ヴェルヌイの党組織は，セミレーチエ全体の党組織の中心ともなっていたが，タシケントのトルケスタン地方党委員会から何らの指導も支援も得ていなかった。党の文書といえば，綱領と僅かの小冊子をもつのみで，党規約は18年6月に自ら作成せねばならなかった[26]。党組織のこの自立性は，トルケスタン地方でタシケントを擁するスィル・ダリア地方と並ぶ党勢をセミレーチエ地方がもっていたことにも裏づけられていた[27]。タシケントに匹敵する党勢とその自立性の故に，19年1月にオーシポフの軍事クーデターで，植民地トルケスタンのソヴェト権力に一時的空隙が生じた際，セミレーチエ州ソヴェト執行委員会は，タシケントにかわりトルケスタン共和国の最高権力と表明し，タシケントへ支援部隊を派遣すると決定したのである[28]。植民地セミレーチエのソヴェト権力の強い中央志向性と，それを担う共産党の組織的自立性は，やがて，中央のモスクワ，タシケントから派遣された活動家《центровики》と地方の活動家の間に強い緊張を生み落すことになる。

第二に，共産党の社会的民族的構成についても，その特質を確認しておかねばならない。セミレーチエの党組織は，18年春から植民地の雑多な社会層から党員をえて拡大していった。党がソヴェト権力樹立後，ソヴェトを母体として，むしろ政権党として発足したという事情により，植民地の検事補や，正教会聖職者など旧体制を支えてきた人々も党に含み込むことが容易となった[29]。これらの旧体制に係った人々に加えて，都市の住民，郡部の入植者のあいだに組織を大きく拡大していったことが重要な特質となる。セミレーチエの党組織は，土地とソヴェトのために闘う人々全てが入党し，「純粋に農民・町民グループ」を基層とする政党の観を呈した。トクマク郡では，19年2月までに郡市トクマクに300人の党員を組織していたが，郡部の入植村落には全て党細胞があり，そこに4000名の主に入植農民から成る党員を擁していたのである。この社会的構成を植民地の民族関係に翻案すると，これは専らヨーロッパ系のロシア人，ウクライナ人の移民から成る党組織を意味した。州都ヴェルヌイの党組織は，18年8月に党員183人中，ヨーロッパ系の人々が169人を占め，原住民は僅か14人であった[30]。1916年ムスリム蜂起以来の民族的不信と敵対の渦巻く植民地セミレーチエで，原住のムスリム民衆を党とソヴェト側に組織し，白軍に対抗させることは事実上，困難であった[31]。ソヴェト権力とその担い手，共産党にとって唯一期待できる社会層は，ヨーロッパ系の入植農民と土地を求めて都市に滞留する住民＝町人であった。共産党は，都市と入植村落の外来移民を基盤としながら，原住ムスリムからも個々の党員を迎えつつ，植民地社会に根をはっていくのである。

第三に，セミレーチエの共産党組織は，その組織的自立性と社会的構成の故に，植民地社会のエートスをその母班として強く刻印することとなった。州都ヴェルヌイには正教会の監督区主座がおかれ，トルケスタン全体の正教活動を統轄していたが，入植農民をはじめとする移民のなかにキリスト教信仰は深い根をはっていた。ヴェルヌイで発行されていた州ソヴェト機関紙『セミレーチエ勤労人民通報』は，共産党員で僧院長シマノーフスキー Шимановский が編集していたが，その紙面には「ユダヤ・ゲルマン人」に反対する反セミ主義の論説がしばしば掲載され，異族人の諸言語を一つの友好語，

即ちロシア語に3カ年で取り替える計画さえ発表されたのである。ヴェルヌイの党員の多くも，キリストとその使徒を「最初の優秀なコミュニスト」とみなしており，党員集会でキリスト教を批判するのは許されない雰囲気であった。植民地の移民にキリスト教信仰が浸潤するような社会的風土のなかで，市のムスリムの党細胞は宗教的狂信に汚染されているとされ，19年3月に解散，再組織されるのである[32]。セミレーチエの党組織は，独自に作成した党規約に農村で横行する私刑 самосуд を原則的に認めないという条項を入れたように[33]，移民＝入植者の社会から，共産主義者の組織としての党の自律性を保持しようと努めていた。だが，農村への党の拡大は，農民の行動様式に順応して進められ，このことは，逆に農民の行動様式と社会意識を党へフィードバックさせる道も開いた。ヴェルヌイ市の党組織は，入植農民の共同体集会，スホードと，その取り決めであるプリガヴォルに依拠して党の組織化を進めている。旧開村ウズン＝アガチュ Узун-агач では，村スホードが党の組織者としてフロール・シロチューク某を選出し，彼に「ボリシェヴィキを組織することを委任した」という取り決めを作成した。他の村落でも同様に村スホードで党の細胞がつくられていった。村人の連帯責任と二人の農民の保証書をつけて，農民は入党し，共産党の組織が生れていったのである[34]。村スホード，プリガヴォル，連帯責任を通じて，末端の党組織は入植農民の共同体への同化にたえずさらされていたといえよう。又，農村からソヴェトへの代表選出も，村スホードで行れ[35]，ソヴェトを通じて，その独占的な政治の担い手となった共産党へも植民社会への影響は及んだのである。セミレーチエの党組織は，移民＝入植者のキリスト教信仰をはじめとする植民地のエートスのなかで，それに深く染まりながら形成されていったのである。

このようにして，19年春には植民地セミレーチエ，そしてトルケスタン全域でも単一の政党，共産党がソヴェトで独占的政治力を行使する一党制の政治システムが形成された。これは，同じく植民社会に基盤をもった左派エス・エルと共産党の合同であったが，同時に共産党から独自のムスリムの政治・社会組織の形成に禁圧的な体制でもあった[36]。ソヴェト権力も，その担

い手たる共産党も植民主義に浸透されていたのである。

注

1) Т. Рыскулов, Первые шаги советов в Семиречье. "Казахская правда", 23 апреля 1935 г., в кн. Т. Рыекулов, Избранные труды. Алма-Ата, 1984, с. 202.

2) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)»., с. 16–17, № 77, с. 85; № 81, с. 87.

3) Там же, № 88, с. 93. «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстне. 1917–1918 гг.», № 227, с. 240. 別の史料はボリシェヴィキ18人，左派エス・エル2人，計20人から構成されたとしている。Там же, № 334, с. 359.

4) ブイコーフは植民地セミレーチエの兵士，農民のなかで，地域の社会運動の指導者として登場してきた。«1917 год в Казахстане», с. 247. 彼を「半年前までエス・エル党にいた」，「左派エス・エルであった」との形容を付しつつ，セミレーチエ州ソヴェト執行委員会議長としての彼の動揺を説明する研究もある。В. К. Григорьев, Блок большевиков с левыми эсерами в Казахстане (октябрь 1917 г.–март 1919 г), «Вопросы истории Компартии Казахстана», вып. 16, 1983, с. 156, 166. しかし，彼の動揺は，彼の嘗ってのエス・エルとの関係によってではなく，ボリシェヴィキと左派エス・エル，ソヴェト両与党の当時の複雑な関係の反映とみるべきであろう。

5) «1917 год в Казахстане», № 213, с. 239–240.

6) А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизии (Северная часть), Фрунзе, 1931, с. 30; «Победа Октябрьской революции в Киргизии», № 172, с. 192–3.

7) Там же, № 206, с. 224–5.

8) Г. И. Трофимов, Из истории компартии Джетысу. «В огне революции», Алма-Ата, 1957, с. 226.

9) П. П. Никишов, Из истории краха левых эсеров в Туркестане. Фрунзе, 1965, с. 84, 87. ニキショーフのこの研究は，トルケスタンに於ける共産党と左派エス・エルの関係を扱う唯一のモノグラフィーであるが，トルケスタンの左派エス・エルの政策の自立性を「偽善」とみなし，その「破産と崩壊 крах и разгром」を追求する方法は，ソ連の「非プロレタリア政党」研究に共通する問題を孕んでいる。

10) Там же, с. 91–92. 10月末現在で，左派エス・エルが700人に対して，共産党は1,500人の党員を推していた。«Победа Великой Октябрьской революции в Киргизии», № 303, с. 321.

11) В. К. Григорьев, Блок большевиков с левыми эсерами…, с. 166.

12) П. П Никишов, Указ, соч., с. 90.

13) Там же,с. 99–100.

14) Там же, с. 100–102; ハサーノフの活動については次の史料を参照されたい。«Победа Октябрьской революции в Киргизии», №№ 212, 214, 218, 221.

15) П. П. Никишов, Указ. соч. с. 90, 110–111; В. К. Григорьев, Блок большевиков с левыми эсерами, с. 156, 166–7.

16) П. П. Никишов, Укав. соч., с. 109–113.

17) Там же, с. 114–5. この10月15日の合同決定は，モスクワやタシケントの状況を考慮して，10月20日には廃止され，再び二つの大会フラクションの自由な選択が，大会代議員に認められた。«Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 151, с. 146–7. しかし，両党はソヴェト大会で合同への志向を明らかに示したのである。

18) 勤労原理に依る土地改革とは，植民地セミレーチエの土地関係の史的文脈のなかで翻案すると，富裕な旧移住民，コサック，原住ムスリムの個別経営を越える「余剰地」を没収し，貧しい移民に分配することを意味した。Г. Трофимов, Из прошлого Компартии… с. 284; «В огне революции», с. 229.

19) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 157, с. 151.

20) П. П. Пикишов, Из истории краха…, с. 114–5, 121. ピシュペク郡の共産党と左派エス・エルの革命派両党は，対立点を孕みながらも，18年11月初めまで「一致協力して」活動を続けていた。両党は，農民ソヴェトや土地＝水利委員会の組織，赤軍志願兵の徴募に際しても協力し，11月7日の革命記念日の祝賀行進にもそろって参加していた。«Великая Октябрьскя соц. рев. и гражданская война в Киргизии», № 124, с. 123; № 109, с. 110; № 137, с. 139; № 140, с. 140–141; № 165, с. 156. 両党のソヴェトを場とするこの「共闘」は，10月24日に郡ソヴェト執行委員会と人民委員会の合同会議で，両党フラクションの合同を決定するに至って最高点に達した。Там же, с. 385. しかし，入植村落の不穏な状況，とりわけ12月に入ってのベロヴォードスコエ村の農民反乱と，一部左派エス・エルがそれへ加担する情勢のなかで，共産党の左派エス・エルへの対応は厳しいものへ変っていた。11月19日の郡ソヴェトの共産党フラクションの緊急会議は，「綱領が同一のため」左派エス・エル党員全てに共産党への合流が呼びかけられたが，入党せず「運動 дело」を防げるものがいると確認し，「左派エス・エルの残留者を左派とは認めず，敵対者と考え，ピシュペク市と郡の同党はもはや存在せず，その集会を禁止すると〔ソヴェト〕執行委員会に提案し，彼らを一掃する」と決定した。さらに，この緊急会議で，共産党は両党の綱領の一致を強調し，左派エス・エルに自党への合同を強く迫り，彼らの入党手続きを定めるとともに，「新党の形成はソヴェト権力とボリシェヴィキ・フラクションの許可なくしては，どのようなものであれ禁止する」と決定したのである。Там же, №169, с. 159–160; № 186, с. 170. 11月19日には両党の合同会議も開かれ，66人の左派エス・エルの離党と共産党への合同が明らかになっているが，この日

が，ピシユペクの政治史とりわけ一党制政治システムの形成の視点から画期を成している。それまでの，左派エス・エルの自発性を尊重しつつ，ソヴェトでの「共闘」を通じての協同と対等の合同方針から，左派エス・エルの解体と吸収を求める強制的方針に転換したのである。12月9日にピシユペク郡ソヴェト執行委員会は，入植農民の反乱が広がるなかで，エス・エル党員の逮捕を命じるのである。Там же, с. 386. 両党の合同と一党制政治システムの形成に至る過程で，この自発性と強制のモメントは，その強弱の程度の差はあれ，ピシュペク地方に限らず各地でみられた。

21) П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 121, 145-6; В. К. Григорьев, Блок большевиков…, с. 172.

22) П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 145-6.

23) 19年1月18日から19日にかけての夜に，軍事コミッサールのオーシポフによる反乱が始まり，トルケスタン政府の指導的人物14名が殺害された。このボリシェヴィキ，オーシポプが引き起した事件の複雑な政治的背景と性格には，既に，1920年代に解明に向けての努力がなされたが，それ以降，現在まで，十分な研究分析がなされず，反革命事件として処理されている。См., С. Муравейский, Очерки по истории революционного движения в Средней Азии. Ташкент, 1926, с. 24-25; С. Болотов, Из истории Осиповского мятежа в Туркестане. «Пролетарская революция», 1926, № 6; Очерки истории Коммунистической партии Узбекстана. Ташкент, 1974, с. 79-80.

24) П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 150-151.

25) Там же, с. 155-7.

26) Г. Трофимов, Из прошлого компартии…, с. 281.

27) Очерки истории Коммунической партии Казахстана, Алма-Ата, 1963, с. 173: Очерки истории коммунистической партии Узбекстана, Ташкент, 1974, с. 82-3, 104.

28) Г. Трофимов, Из прошлого компартии, с. 293.

29) Там же, с. 289. 植民地の革命に深く通じていたサファーロフは，トルケスタンではソヴェト権力がボリシェヴィキと左派エス・エル両党をつくり，両党とも著しい数の「冒険主義者，出世主義者」の隠れ家となったとし，ここではボリシェヴィの党も「政権党」以外ではなかったと指摘した。革命の指導者の一人として活躍し，共産党との合同に導いた左派エス・エルの指導者で医師のK. Я. ウスペンスキーは，その政治的経歴を大ロシア民族主義の「ミハイル・アルハンゲル同盟」から始めている。彼に植民地トルケスタンの革命の性格が人格的に表現されているといえよう。Г. Сафаров, Колониальная революция (опыт Трукестана), М., 1921, с. 67, 71.

30) Г. Трофимов, Из прошлого компартии…, с. 279-280.

31) Там же, с. 282-3.

32) Там же, с. 289–290, с. 294.
33) Там же, с. 281.
34) Там же, с. 289.
35) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», №№ 100–105, с. 101–102.
36) アラシュ・オルダ，イスラム会議 Шуро-Ислам の組織も禁止され，ピシュペク郡では全てのムスリム組織を廃止することが18年9月に決定されている。Там же, № 141, с. 141; История Киргизии Т. II. Фрунзе, 1956. с. 60.

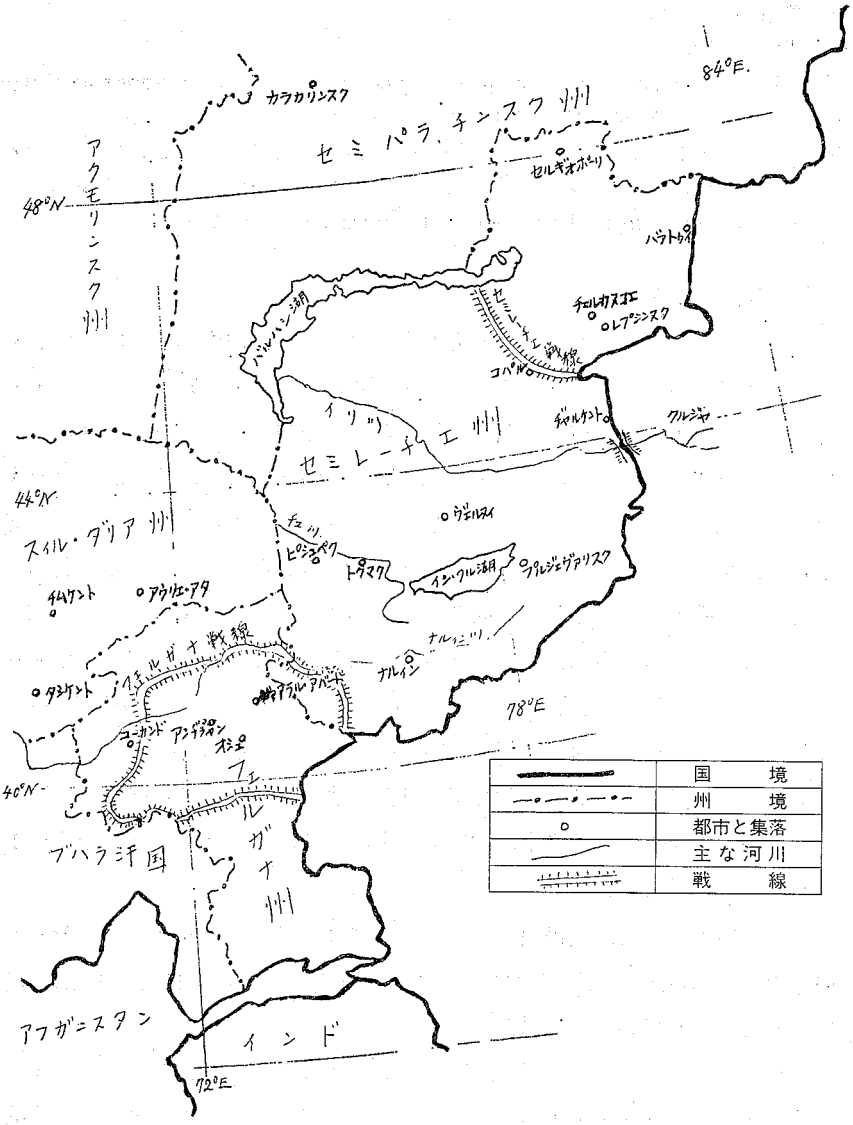
III. 内戦と農民革命

セミレーチエ州でのソヴェト権力の樹立は，同時に内戦への幕開けでもあった。4月16日に，ヴェルヌイ近郊の兵村からコサックが，アラシュ・オルダの部隊を加えて，市を包囲し対峙した。この包囲はやがて解かれたが，6月には本格的な内戦に突入することになる。6月21日に，州の北部の要衝セルギオポーリが，侵入してきた反革命コサック軍に占領され，これに呼応して，レプシンスク，コパル両郡のコサックも行動を起した。ここに北部セミレーチエ戦線が形成された。同じ6月に，中国新疆省から，ヂャルケント，プルジェヴァリスク方面にコサック軍が侵入し，ここにも戦線が形成された。さらに，7月には隣接するフェルガナ州でバスマチとの戦線が形成され，これはセミレーチエ南西部も捉え，影響を及ぼした。1920年1月に，ヂャルケント＝プルジェヴァリスク戦線で，3月に北部セミレーチエ戦線で，反革命の中核を成したコサック軍が中国領へ潰走して，内戦状況はようやく終了した[1]（地図1参照）。

この内戦のなかで，植民地セモレーチエでは一党制政治システムの形成へ向ったのであるが，入植農民は，ソヴェト権力と党からも自立（律）的に農民革命を実現していくことになる。

1918年春からトルケスタン地方，とりわけ植民が最も進行していたセミレーチエ州でも，ソヴェト権力の土地政策に支援されつつ，農民革命が本格的に展開していくことになる。この農民革命は，内戦のなかでコサックと対峙しつつ，原住ムスリムの土地への占拠を続けつつ，入植して間もない貧しい農民 новоселы を主体に，入植村落の富裕な旧くからの移民 старожилы の

地図1　セミレーチエ州の内戦



土地をも収用しつつ，中央部ロシアの勤労＝均等原理を，植民地でも実現しようとするものであった。18年10月に開かれた第一回セミレーチエ州ソヴェト大会は，土地政策に於て「土地はそこで労働するもの，個人の労働でそれを耕すものへのみ」渡すという原則の実施を農業コミッサールに求めた[2)]。だが，ソヴェト権力にも，入植農民のあいだでも，原住民の土地への占拠に対する明確な批判を欠くため，この農民革命は植民主義を温存し，むしろ強化する方向に作用した。

18年春から入植村落では，富裕なクラークや大借地農民のもとからの土地収用が始っている。ガヴリロフスコエ村（ピシュペク郡）の村スホードは全ての借地を「無主で自由な свободный」土地とみなし，窮乏した予備役兵に譲り渡すと決定している。同郡のウスペンスコエ村，ボゴスロフスコエ村でも，大借地農やクラークからの土地収用が決定されている[3)]。入植村落でも，中央部ロシアと同じく，村スホードに結集する農民が，勤労・均等原則にのっとって，土地割替を実現していったのである。ヴィソコエ村（プルジェヴァリスク郡，イヴァニツク郷）では，19年3月24日に村総会がもたれ，88人のスホード参加権をもつ経営主の内，62人の農民が参加して，「一致して」プリガヴォールを採択している。ここで，家族員構成からみて余分とされる，あるいは，村団から排除された農民の宅地菜園地を無償で収用すると取り決めている。同時に，これらの収用分配される宅地菜園地の柵，果樹，牧草などの取得を以前の持ち主に認め，その投下した労働の成果を保障したのである[4)]。ここに，農民の勤労と平等を求める土地革命の理念が鮮かに読みとれる。

しかし，この入植村落の土地革命は外に向っては，原住ムスリムの土地を占拠し，自らの耕地を拡大する論理を内在化させていた[5)]。これは，1916年にムスリム蜂起が激しく展開し，入植農民のムスリムへの敵意が強く存続したセミレーチエ南部で特に顕著にみられた。トクマク地方では，18年秋に第二回郡ソヴェト大会が，農民の「消費＝勤労規準」を定めている。この規準によると，5人の成人を含む一家族に，灌漑地25デシャチーナ〔以下 d. と略記，1 d.＝1.09 ha〕，あるいは37.5 d. の天水畑を与え，これに菜園地25 d.,

草刈場 5 d., 15 d. 以下の牧地を付加するというものである。これは平均的な入植農民家族の経営能力をはるかに越える規模であった。大会は，さらにトクマク地区をピシュペク郡から分離し，自立することを決定したが，これは，新しい移住者 новоселы を受け入れずに，1916 年蜂起のキルギス難民をピシュペク郡へ放逐し，この地方に高い消費＝勤労規準に裏づけられた，入植者のファーマー的経営を確立しようとするものであった[6]。翌 19 年 2 月には，トクマク郡での土地社会化実施のための移行措置を述べた「指導書 инструкция」が出されている。この指導書では，ロシア人と原住民の間のあらゆる「境界」は存在すべきでないとされ，耕種農業に適する全ての「未占有の予備地」を土地なし農民に与え，畜産には農業に適さない土地を割り当てるとした。そして，灌漑耕地 5 d., 草刈場 1 d., 家畜追込地 1～3 d. を，食いぶち農民一人の分与規準とし，16 才に達した男子には宅地菜園地 1800 サージェン (=3/4 d.) を受けとる権利を認めた。しかし，原住民の畜産経営には耕地は分与されないと述べたのである[7]。

ピシュペク郡では，18 年 9 月の郡ソヴェト大会で，農業コミッサールは，「土地なしの都市の，一時農村に生活する住民が，一年間の飢えから，土地に殺倒し」，大量の土地を正確な記帳もなく臨時の用益として渡さざるをえなかったと情況を説明し，この「土地占拠」が継続中であると報告した。彼は，さらに，土地なしの新しい移民 новоселы を，彼らが居住する村団に登録し，その村で宅地菜園地を与えるのは「不可能であり」，隣接するキルギス人の土地へ彼らを入植させることはできるが，さりとてこれは将来，問題を引き起こすことになろうと述べた[8]。大会で，郡コミッサールは飢えたキルギス人の悲惨な窮状と，彼らを富裕なキルギス人のもとへ疎開させざるをえない状況を報告し[9]，法務コミッサールは，彼らにロシア人入植者が，略奪，切盗，殺人，私刑などの犯罪をなしていると指摘した[10]。大会は，トクマク地方代表の分離の主張を反対多数で拒け[11]，コミッサールの報告に窺えるように入植民の飢えたキルギスへの抑圧と，彼らの土地の占拠に危惧を抱いたのであるが，この危惧は現実となっていく。移民＝入植者に依拠したソヴェト権力は，彼らの志向に引き寄せられ，適合させられつつ動いていかざ

るをえなかったのである。18年10月末に出されたピシュペク郡農業委員部通報では，土地＝水利委員会が組織され，冬畑の播種と夏畑の準備が行れたと伝え，各食いぶち当り播種地0.5 d.の分与を提案していた。このために，同通報はキルギス人の，又，入植村落の，あるいは国有の貸し出されている土地を，さらに「キルギス人によって耕されない土地」を，キルギス人との協定をえて土地分与のために利用すること指示していた[12]。飢えたキルギスの牧民が土地を耕すことができない現実の状況では，これは，キルギス人の土地を占拠し，それをフォンドに含めつつ，土地改革が進展することを意味した。

プルジェヴァリスク郡でも状況は同じであった。19年1月21日に，キルギス人の諸郷から代表を集めて会議がもたれた。ここで，キルギス人が大量に土地を奪われた状態にあることが明らかとなった。それは，郡の土地部が「自由な未占有のсвободные土地」としてキルギス人の土地を1919年の貸出地に含めたためであった[13]。このような原住民からの土地取上げが，彼らに対する入植農民の暴圧と一体となって進行していたことが，トルケスタン戦線軍事革命委員会の警告からも窺える。19年3月10日付で，軍事革命委員会のM. Ф. フルンゼとB. クィビシェフの名で当郡の共産党委員会へ電文が打たれている。そこでは，農民によるキルギス人への「大規模な迫害」が行れているのは，「民族的激情を煽り，自らの支配の強化を望む反革命クラークの影響下に，当郡の農民が全くおかれている」ことを示すものであると指摘され，当郡に「巣くう反革命クラークの犯罪的徒党」にソヴェトと党の活動家が示している「消極性」が厳しく批判されていた[14]。このような警告に応へて，19年5月の第二回郡民主大会は，「不法な土地占拠と移住」は行わないと確認している。しかし，この決定は「不法なсамовольный」行為として「土地占拠」，「貧しいものへの暴圧」一般をあげ，被害者キルギス人へ一言も具体的に言及しないものであった。大会のアピールは，さらに，「我々の手に秩序と合法性はある。もし諸君が，介入による重荷全てを負うのを欲しないならば，我々自身の生活の建設に中央の部隊が介入するのを許してはならない」と訴えていた[15]。このように中央の介入を警戒し，その介入を回避するために自己規制しつつ，入植農民を主体とする土地革命が進行した

のである[16]。

この入植農民主体の土地革命は，民族の差別なく，農民に均等に勤労原理に従って土地の分与をはかるものであり，その点で，零落したムスリム牧民が土地を得て農耕定着するのを誘引するものでもあった。しかし，現実には，占拠された土地が返却されないのみならず，農耕のための牧民への土地分与は進展をみせなかったのである。クガリンスク郷（コパル郡）のカザフ人110家族は，1917年の飢饉で畜群を失い，遊牧を続けるのが困難となり農耕定着に移ろうとした。彼らは1918年にソヴェト当局に土地分与を請願するが，なしのつぶてで，1921年を迎えていた[17]。第一アクサイ地区（ヴェルヌイ郡）の原住ムスリムの作男・貧農組合が，21年10月にトルケスタン共和国中央執行委員会へ宛てた訴えは，彼らが革命と内戦のなかで耐えた苦難と土地確保の困難な状況を記している。この訴状は，革命前には「クラーク」がムスリムから「零細な土地」を奪い，作男として働くことを強い，家畜の踏害への弁償を求め，彼らを恐喝したと，彼らへの抑圧について述べている。だが，重要なことは，革命後に関する彼らの訴えである。1917年2月の革命後，「さらに一層，抑圧が増した」とこの訴状は指摘し，1918年には，コサックの支配下にあった彼らは，コサックの逃亡後，その支持者とみなされ悔辱され，家畜没収，銃殺にさえあったと述べた。1919年には，彼らにも土地が与えられたが，それは瘦せた石がちの土地だったのである[18]。

さらに，入植者の土地占拠を伴う土地革命は，この地方の原住ムスリムの生業である遊牧畜産経営の土地利用形態をずたずたに引き裂くことになった。表1は，ヴェルヌイ郡における遊牧畜産経営に対する，とりわけ遊牧路（畜群通路）への農民の様々な阻害行為の一覧である。この表は，ヴェルヌイ郡全体のわずか8郷について，それも遊牧路に関するもののみ示しているが，遊牧路が牧民経営にとって，季節の牧地を結ぶいわば生命線を成していたことを考慮すれば，この限られた資料からも十分に，牧民経営にもたらされた困難な状況が察知される。この表の約30に及ぶ遊牧路に関する状況は，1918年以降も「一時的な土地利用者の耕作」，「不法入植者の建物」などで通路が狭搾され，水飼場や牧地の確保に困難をきたし，遊牧の行程自体も数日

表1　ヴェルヌイ郡における遊牧路の狭搾状況 (1921年1月現在)

1.	アルマアタ郷：6つの畜群通過路 скотопрогонные дороги がある。全ての道で途中休留のさい，草と水の確保が十分でない。林野巡視員をはじめとする林野庁が林野区の通過を阻げている。例えば，第5，第6路で，通過に対して，特別の現物支払いを取っている。 第1路：Тастак 村を通る。通過路は，村民の穀作により狭搾されている。農民によって道は狭められ，踏害がやむをえず，そのため畜群の進行が阻げられる。 第4路：タシケント街道の下の Аскай の地を通る。畜群はぬかる沼を通らねばならない。沼の周りには畑があり，通過を阻げているためである。 第7路：Бутаковский 谷に沿っている。林野区と蜂房場が畜群の通行を大いに阻げている。小 Алма-Ата 谷でも，同じ原因で通行が阻げられている。畜群の通行 скотопрогон は5昼夜で行れる。
2.	東タルガル郷：7つの遊牧路 кочевные дороги がある。 第1路：Котурбулак 谷へ通じる。「臨時土地用益者」の耕作により，畜群通路全てが閉ざされた。1917年までは狭搾されていたが，通行は可能であった。1918年に上記の理由で殆んど全く閉鎖された。 第2路：Бельбулак の河口に入るさい，10年前に住みついた10戸に及ぶフートルの一群がある。これが畜群通過を全く阻げている。この谷に沿い沼の上で，遊牧路は林野保護線 кордон によって圧搾されている。 第3路：Джанышар から追い出され，Кульджа 道に一時住んでいる農民 крестьяне が，通行の主な阻げとなっている。 第4路：畜群通路はタルガル兵村までいき，ここで村の柵に沿って東に向う。ここで，建物，旧移住民と1918年の新移住民によって畜群通路は占拠されている。ここを通って畜群は五つの土地 урочища へ追い込まれるので，この道は不可欠である。兵村から山地までにも，畜群通路は播種地で狭搾され，ところどころで全く通行不可能となっている。 第5路：イリ川に沿って行くと，Александровское 村の畑作によって畜群の通行が阻げられる。この畑地は Кульджа 道に至るかつての遊牧路まで蚕食している。Кульджа 道の上では，Талгар 兵村と Иссык 兵村のコサックの畑作で，畜群通路は狭搾されている。さらに，通路は M. Легостаев の養蜂経営によって阻げられている。 第6路：道は全く自由に通れ，草地も水飼場を確保されている。 第7路：Иль 川から Кульдажа 道までは自由に通過できる。草と水が確保されている。Кульджа の道から Турген 川に沿って，道を Турген 村と一部 Болтаваевсий 村農民の播種地が占有している。 第8路：第7路から分岐し，Турген 郷のキルギス人の利用地に沿って通ってい

る。Терис-Бутак 谷の河口で，道は播種地とクローバ畑によりひどく圧搾されている。道が5サージェンの幅まで拡張されると畜群の通行が全く自由になる。Асы の地に遊牧を行わないタルガルの全ての郷は，夏の牧地へ2昼夜の，また，Асы の地に遊牧するものは11昼夜の畜群通行を行う。

3. トウルゲン郷：3つの畜群通路がある。
第1路：Кульджа の道より上は，Восточное 村農民の分与地に沿って道はのびている。村の農民，特に Ефимов と Коршов は，耕起により，遊牧路を全くふさいでいる。その後，道は Аткас の地の Михайловское 村住民 Еремеев の蜂房場まで通行自由である。Еремеев の蜂房場では，停留のさい畜群を周囲に放つのが阻げられている。
第2路：住民 Иванов の借りていた土地が阻げとなっている。この土地は，1918年から土地委員会へ渡され，Восточное, Маловодное, Евгельевское 村の独立自営農民 единоличники の手に渡った。彼らは遊牧路を全て耕し，畜群の通行を阻げている。草と水は確保されている。
第3路：Асу-Сай 谷に林野警備署 кордон が建てられ，林務官が署の近辺に畜群を放すことを許可しない。
夏の牧地 Асы まで，全ての通路で2～3昼夜の行程である。

4. 東カステク郷：4つの畜群通路がある。
第1，2路：Прудки 村の分与地まで，通行は自由で草も水も保障されている。村の分与地に近づくと村の両側に沿って道は二つに分れ，一方は〔村の〕牧場と草刈場によって，他方は，村農民の播種地によって狭搾されている。これ以降，通行は自由である。Кара-Кастек 谷の河口で，Бургун 村の農民の播種地によって狭搾されている。その後，夏の牧地まで通行は自由である。
第3路：Кара-Кыстак-Дала の地で3ヴェルスタの幅の通路は，1918年から Прудки 村農民によって不法に占拠されている。ここに種が播かれ，キルギス人の畑とクローバーは略奪されている。同村農民の交叉地条の土地切り足し，草刈り場，播種地によって，畜群通路は狭搾されている。
遊牧行程は2日である。

5. 西カステク郷：基本的な畜群通路は2つである。
第1路：Чиен 村と Вильямовское 村の農民の播種地が阻げとなっている。農民は不法占拠したキルギス人の土地に種をまき，遊牧のための道を通れなくしている。Дунгулек-Ой の地では，上記両村の農民が草を刈り，自分の分与地ではなく，占拠したキルギス人の土地に自分たちの家畜を放っている。
第2路：Кара-Саз の地で Чиен 村農民の播種地と菜園によって，畜群通路は全くふさがれている。これはキルギス人の土地である。Дергес-Баур の地では，

	同村農民がキルギス人の土地を不法占拠し，播種し，通行を阻げている。 第3路： 第2路の続きである。全行程，通行に阻げはない。 全路，夏の牧地まで3日の行程である。
6.	ジャイリムイシュ郷： 2つの遊牧路がある。 第1路： Ново-российское 村農民の分与地のところで，農民の播種地により道がいくらか狭搾されている。その後，夏の牧地まで，全く通行自由である。 第2路： Карасу-Джагасы の地で，製粉場経営者4人の播種地と，一部はキルギス人の耕起によって道は狭搾されている。Таусагысын の地では，Ново-Российское 村農民がキルギス人の土地に播種し，1ヴェルスタにわたって道が狭搾されている。Ошак-Тын-Ойы の地では，Ново-Российское 村と東 Каргалы 村のロシア人農民がキルギス人の土地で草を刈り取り，道は再び狭搾されている。 これらの路は6昼夜の行程である。
7.	チェモルガン郷： 4つの道がある。 第1路： Каскелен 兵村の牧場が通路の阻げとなっている。 第2路： 林野区にそって道が続く。林野庁の巡視員とのいざこざが起きている。 第3路： Ащибулак の地で，畜群通路は Самсоновское 新村の播種地のなかを通り10ヴェルスタにわたり狭搾されている。そこから夏の牧地まで通行自由である。 第4路： Карасу の地から Чубар-Ат 谷の河口まで，Самсоновское 村農民の分与地があり，通路は全く閉ざされている。Кебедже の地には，以前，キルギス人の草刈り場があったが，現在は Самсоновское 村農民の家畜が放たれている。ここから夏の牧地までは通行自由である。 これらの道で畜群通行に2〜3日を要する。
8.	カラム郷： 1917年まで当郷にはかなりの数の畜産経営があり，Сюгатин 郷と Кызыл-Бурковск 郷のキルギス人と共同で，畜群通路を利用していた。しかし，1918年に，Сюгатин 郷と Кызыл-Булковск 郷，一部 Бокийск 郷のキルギス人とロシア人の村落 Кукиковка, Сургун, Зайцевское の住民によって，ひどく零落させられ，移牧する畜群がないほどである。

典拠，ヴェルヌイ郡の遊牧路の状況究明に関する会議議事録。この会議は1921年1月26〜27日の両日，原住牧民の代表を集めて行れた。«Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 85, с. 143–147.

間に短縮せざるをえず，彼らの畜産経営が萎縮し危機にさらされていることが判明する。例えば，東カステク郷の4つの遊牧路の内，第一，第二路は，プルドゥキ村の近くで，農民の牧地，草刈場，播種地により，他のところではブルグン村農民の播種地により狭搾されている。第三路もまた，プルドゥキ村の農民が1918年から「不法勝手にсамовольно」占拠し，土地の切り足しを行い交叉地条を生み出し，彼ら農民の草刈場と耕地で，狭搾されていたのである。四路の内，三路が狭搾状態にあり，夏の牧地までの行程は2日間と短縮されている。さらに，この夏の牧地＝夏営地とて，畜群を飼養するのに十分ではなく，隣りのピシュペク郡の「1918年に畜群を減らした」キルギス人から夏営地を借りなければならない窮地に陥っていたのである[19]。

入植者を中心とする農民革命の進展のなかで，原住ムスリムの農作業への徴用も行れた。これは，19世紀から20世紀初めの植民地セミレーチエの富農経営の下での，原住ムスリムの作男としての使役，さらに，第一次大戦下で出征兵士家族の農作業への徴用に引き続くものであった。1919年夏に，セミレーチエの各地で原住ムスリムの農作業への徴用が行れている。19年6月20日にプルジェヴァリスク郡執行委員会は郷村の執行委員会へ，赤軍兵士の家族と貧しい農民の支援のために，「定職をもたない全ての市民，とりわけムスリム」に農作業（灌漑溝の清掃，穀物への給水，草刈り，その他の季節ごとの畑作業）へ，正当な支払いを行って動員することを命じた[20]。同じ指令は，6月21日にピシュペク郡でも出されている[21]。トクマク郡代表が，19年8月の第3回州ソヴェト大会で，「18才から54才までの原住民の農作業への動員はうまくいった」と報告しているとしても[22]，この徴用が原住民にとっては他律的な，しばしば抑圧的な措置であったことに疑いはない。トクマク地方で，移民によって土地を奪われ窮迫したムスリムに土地を分与し，農耕定着化させる必要が，ムスリム社会の外から他律的に訴えられるなかでの徴用であったし，従って，原住ムスリムの徴用回避の傾向がみられるのは当然であった。19年8月のヂャルケント郡ナルィン地区の入植村落の代表者会議の議事録は次のように記している。「原住民労務者は何人かづつ，いくつかの村に送られたとはいえ，この動員は紙の上のことだけであ

り，彼らは一日働くと，定められた規準以上の割増し支払でも働こうとせず，自分のアウル集落へ逃げ去っている」[23]。1920年夏にも，原住民の農作業への徴用＝動員は行れている[24]。しかし，1916年ムスリム蜂起以降の，この地域の住民の民族的不信と敵対，入植農民による土地占拠の継続のなかでは，原住民の農作業へのこのような徴用が成功を収めるのは困難であった。

植民地セミレーチエに於ける農民革命は，18年春から内戦の終る20年までに本格的な展開をみたが，入植農民の原住民に対する土地占拠と抑圧という本質的特徴を考慮すると，その幕開けは，既に1916年ムスリム蜂起への対応＝鎮圧過程から始っていたといえよう。ここで，この植民地に於ける農民革命を，いくつかの統計資料を利用しつつ，全体的に総括しておこう。

表2はセミレーチエ州人口の民族別構成を，1916年1月1日現在と1920年8月の人口調査の時点で比較したものである。この間に，当州はムスリム蜂起，革命と内戦を経て，その人口を136万2千2百から95万6千6百へと29.8%の減少をみた。これを民族別構成でみると，1916年にロシア人はウクライナ人を含め13万2千人余で州人口の9.7%であったが，驚くべきことに内戦の終った1920年には，26万8千人となり，州人口の28%を占めるに至った。彼ら移民＝入植者は，この間に絶対数で2倍に膨れあがり，人口構成でも3割弱まで肥大したのである。他方，トルコ＝タタール系の原住民は，絶対数で120万5千から65万2千9百人と激減し，人口構成でも88.5%から68.2%と，その比率を著しく低下させたのである。これは，1916—20年に入植民社会が原住民社会の萎縮のなかで，膨張し大きく増殖したことを示している。

セミレーチエ州は，1916—1920年に経営数を241,750から181,182へと，約四分の一の減少をみせた。だが，定住民（入植者と原住ムスリムを含む）の経営の減少が，9.2%であったのに比し，原住ムスリム牧民の経営は，18万から12万6千へと，約3割の激減であった[25]。経営数においても，原住ムスリムの経営が入植民の経営に比して著しく衰退したことが裏づけられる。これを，1917年から1920年までの変化でみると，原住ムスリムの牧民経営の著しい衰退という大勢は変らないが，入植農民の経営は，植民地での農民革

表2　セミレーチエ州の人口構成の変化 (1916～1920 年)

民族別＼年	1916 年		1920 年	
ロシア人	132,133	9.7%	134,854	14.1%
小ロシア人			133,263	13.0%
ポートランド人	1,362	0.1%	6,674	0.7%
他のヨーロッパ系	—	—		
小計	133,495	9.8%	274,791	28.7%
カザフ人	1205,547	88.5%	425,063	44.5%
キルギス人			172,501	18.0%
ウイグル人			45,005	4.7%
ドゥンガン人			10,357	1.1%
モンゴル人	21,795	1.6%	28,903	3.0%
他のアジア系	—	—		
小計	1227,342	90.1%	681,829	71.3%
その他	1,362 人	0.1%	—	—
総計	1362,199 人	100%	956,620*	100.0%

1916 年のセミレーチエ州人口の民族別構成は次の文献に依拠した。«Ежегодник России 1916 г.». вып. 1, 1918, Петроград, 1918, с. 46, 51. 1920 年の資料は次の文献からとった。«Социалистилеское строительство в Казахстане в восстановительный период (1921–1925 гг.)», сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1962, № 3, с. 22.

* セミレーチエ州の全人口は，959,620 人と報告されているが，民族別構成からは 956,620 人となるので，こちらの数字を採用した。3,000 人の差は全体の認識に誤った解釈を生じないであろう。1920 年代のソ連の統計集では，1920 年のセミレーチエ州の人口は中央では集計総括がなされておらず，1916 年ムスリム蜂起前の人口数で代替されている。См., «Статистический ежегодник. 1918–1920». Т. VIII, вып. 1, М., 1922, стр. 4. 1920 年のセミレーチエ州の人口をほぼ正確に算出していると思われるのは，1920 年の農業調査統計資料である。この集計にはレプシンスク郡の二郷の人口が調査されていないが，州人口，896,444 人，内定住ムスリム 87,065 人 (9.7%)，ムスリム牧民 545,160 人 (60.8%)，ロシア人 263,572 人 (29.4%)，ソホーズ構成員 647 人 (0.1%) という数子を出している。Труды ЦСУ, Т.II. вып. 7, М., 1923, с. 146.

命のなかで立ち直り，経営を拡大していったのである。この革命と内戦の時期に，牧民は同州で人口の 22.7%，経営の 22% を減少させた。郡別にみると，ヂャルケント，プルジェヴァリスク，ナルィン郡では，1916 年蜂起で逃

避した難民が戻って来て人口・経営数を増大させたが，他の諸郡は内戦と飢饉のため，人口・経営数ともに著しく減少したのである。これに対して，入植農民の経営数は州全体で1917年から1920年末までに15%の増大をみたのである。内戦の場となったレプシンスク郡でのみ，ロシア人は人口の9%，経営の7%を失ったが，他の全ての郡で，即ち，ヴェルヌイ郡で48%，プルジェヴァリスク郡で35%，ナルィン郡で34%，ヂャルケント郡で26%，タルドゥイ＝クルガン郡で20%，ピシュペク郡で11%の農業経営の拡大をみたのである[26]。

植民地セミレーチエに於けるロシア人をはじめとする入植民の人口と経営が，革命と内戦期に増大したことは，取りも直さず農民革命の結果であったが，この農民経営の増大をもたらしたいくつかの具体的要因にも言及しておかねばならない。第一に，1919—20年に入植農民のあいだで経営分割＝分家が広く行れたことである[27]。これは，ロシア中央部の農民革命のなかでも，同様な現象が観察されるが[28]，土地を獲得し分離・独立する機会が与えられ，その可能性が現実性に転化したことを示している。第二に，大経営の国有化が行れるとの噂が州全体に広まり，農民がそれを恐れて経営分割に向ったことがあげられる。このような経営分割＝分家によって，経営規模は縮少し，生産力と農具は分散し，平均家族員数は州全体で6%も低下したのである[29]。このような分家による経営数の増大とともに，第三に，外からの流入による経営の増大も加った。内戦のなかでも，移民は各地から植民地セミレーチエへ到来し，ここに経営をかまえたのである[30]。このようにして，経営分割＝分家によるいわば内的なものと，流入という外的なものがあいまって，経営数を増大させつつ農民革命が植民地で展開していったのである。

農民革命は，農民経営の数を増大させながら，彼らの経営の平準化をもたらした。播種地なし経営は，1917年の27.6%から1920年の17.6%に減少した。革命前に植民地で広く行れていた借地は，1920年に全農家の4%が，それも平均4.9 d.の借地を行っているところまで縮少した[31]。他方で，富裕な旧移住民を中心とする経営が勤労・均等原理の実施により，経営規模が縮少したこと，経営分割＝分家で解体していったことを考えると，入植農民は全

体として平準化へと向ったのである。この平準化を底部から促迫した要素として，革命と内戦のなかでたえず生み出された土地なし経営の存在がある。この土地なし経営には，シベリアから流入した移民や戦線の移動で土地を失った人々が含まれるが，彼らは1917年に農業経営の2.4%から，1920年の12.5%へと増大するのである。さらに穀物商業の禁止と食糧事情の悪化で，非農業分野の就労者が，食糧を求めて農業経営を目指した[32]。これらの社会層は，土地を求め，下から農業経営の平準化を求める圧力を課したといえよう。このようにして農民経営は増大しつつ平準化され，その規模は縮少した。1917—1920年に，農民経営はその家族員数を6%減らし，播種地は一経営平均2.2 d. から1.5 d. へと減らし，穀物商業の禁止のなかで，自己の消費内に生産を限定する自給的性格を強めた[33]。

ムスリム蜂起，革命，内戦と続く政治的激動と経済的困難のなかで，植民地セミレーチエでは農民革命が展開し，内戦の終る1920年末には，植民地社会は基本的に三つの経営形態へ成層化されていた。1920年の農業調査では，当州の181,188経営のうち，ロシア人をはじめとする入植者の経営が26.5%，定住原住民の経営が9.1%，原住牧民経営が64.4%であった[34]。ロシア人経営は，農民革命のなかで経営数を増し，肥大し，植民地社会で増勢し，平準化した。他方，ムスリム定住民は経済的困難と農民革命のなかで，比重は増したが，ロシア人経営の下方に劣等な農耕民として配置された。さらに原住牧民経営は，比率を低下させ，入植者に遊牧を寸断・破砕され，存亡の危機に立たされた[35]。ここでは，ロシア人をはじめとする入植者の経営のみが食糧を自給できる状況にあり[36]，飢餓線は第一成層たる入植民と，第二，第三の成層たるムスリム住民の間を走っていた。植民地セミレーチエの農民革命は，1916年ムスリム蜂起の鎮圧過程での原住ムスリムへの抑圧と飢餓のなかで始まり，革命で鼓吹された入植者＝移民の「土地を自ら耕す者へ」のスローガンの下で，外部からの流入移民も受け入れつつ，内戦期に満開花したのである。植民地のこの農民革命は，その過程から，又，結果からしても，ムスリム民衆を政治的に疎外し，彼らの土地への侵害も内包する，中央部ロシアの農民革命とは異なる植民主義的性格を強く温存するものであ

った。

注

1) «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Казахстане и образование Казахской АССР», сб. документов и материалов, Алма-Ата 1947, с. 23, 38, 267, 268, 278; № 143, с. 202–3; № 146, с. 205–6, «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Кигризии (1917–1920 гг.» с. 22; № 319, с. 289–290; История Киргизии, т. II. Фрунзе, 1956, с. 71–72.
2) Г. Трофимов, Из истории Компартии…, с. 286.
3) История Киргизской ССР. т. 3, с. 162; «Победа Октябрьской революции в Киргизии», сб. док. 1917–1918. Фрунзе, 1977. № 234, с. 254–5; «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)» № 50, с. 65.
4) Там же, № 206, с. 188–9.
5) ピシュペク郡ソヴェト土地部が，18年春に作成した「方針 программа」では，民族の差異なく，勤労＝消費規準で土地分与を行うことを基本としていた。だが同時に，「本1918年には」と限定しながらも，「より多く播種することを望むもの」に，広範に雇用労働を用い，「自由な土地 свободные земли」を利用することを許可していた。«Победа Октябрьской рев. в Киргизии», № 237, с. 257–8. 「土地を勤労人民へ」という原則は，原住民の「自由な土地」の占拠を容認する論理を内在させていたのである。
6) П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 93–94.
7) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 196, с. 180–182.
8) Там же, № 130, с. 129–130.
9) Там же, № 131, с 130. 餓死したキルギス人の死体が，郡の各地に散乱していると大会で報告された。там же.
10) 法務コミッサールは，この特異な「犯罪」が生じる状況を次のように説明している。「嘗ての罪〔1916年ムスリム蜂起のこと—西山〕に対してさえ，ロシア人はキルギス人を襲い家畜を奪った。飢えたキルギス人は，当然にも一切れのパンや馬鈴薯をロシア人やサルト人から盗まざるを得ず，このため残虐な私刑にあったのである」。Там же, № 131, с. 132. このような犯罪がセミレーチエに蔓延していたことが，ピシュペク郡の隣りのアウリエ・アタ郡（スィル・ダリア州）のカラ＝バルトゥイの村スホードが，18年2月7日に作成したプリガヴォルの文言から判る。「最近，ロシア人とキルギス人の関係が鋭くなっており，国を崩壊と紊乱に導く略奪，私刑，その他アナーキーで突飛な非常な行動がみられる。我々の隣りのセミレーチエ住民のところでは，スホートで棒で打ち懲罰するのがしばしばみられる」。«Победа Октябрьской

рев. в Киргизии» № 233, с. 253,

11) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 131, с. 130.

12) Там же, № 161, с. 153–4.

13) Там же, № 195, с. 179.

14) Там же, № 202, с. 186.

15) Там же, № 221, с. 200.

16) このような「自己規制」は，20年3月3日付のピシュペク郡革命委員会の指令にも窺える。Там же, № 308, с. 276. だが，入植農民主体の土地革命のこのような「自己規制」が，原住民の土地への権利の回復にとって不充分であったことは言を俟たない。20年11月にプルジェヴァリスク郡土地部は，「キルギス難民の土地は，不法入植村落が占拠した土地を除いて，20年春に全て彼らに返却した」と答えていた（傍点強調—西山）。ロシア農民が既に不法占拠した土地は返却されず，手がつけられなかったのである。さらに，同郡の土地改革推進のための土地＝水利部は全て，ロシア人入植村落に設置され，9つの入植村落の農民867人が，帰郷したキルギス難民の土地12,320 d. を占拠し続けていた。«Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 14, с. 51–53.

17) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 79, с. 135–6.

18) Там же, № 123, с. 184.

19) Там же, № 85, с. 143–7.

20) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 239, с. 214. とりわけムスリム住民を対象とする徴用は，5月24日の党，ソヴェト，社会団体代表の協議会が作成した州ソヴェト執行委員会の指令書に基づいている。19年4～5月から州全体で，ムスリム住民へ人馬の徴用が課されている。«Иностранная военная интервенция и гражданская война в Средней Азии и Казахстане». т. 1. Алма-Ата, № 440, с. 558; № 433, с. 544; № 465, с. 583.

21) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.», № 240, с. 214.

22) Там же, № 257, с. 228.

23) Там же, № 256, с. 226.

24) Там же, № 368, с. 335; История Киргизской ССР. т. 3, Фрунзе, 1986, с. 203.

25) «Социалистическое переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане. 1917–1926 гг.», документы и материалы. Ташкент, 1962, № 111, с. 217.

26) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 2, с. 21–22.

27) Там же, № 2, с. 22.

28) Th. Shanin, *The Awkward Class. Political Sociology of Peasantry in a*

Developing Society. Russia. 1910–1925. Oxford, 1972, pp. 157–9. 拙稿「ロシア革命と農民—共同体における“スチヒーヤ”の問題によせて—」『スラヴ研究』29号, 1982年, 31頁。

29) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 2, с. 22.

30) Там же, с. 32. 革命と内戦期には，移民の流れが止ったという通説に対して，スカチェコが，シベリアへの移民がこの時期にも継続していたと指摘している。A. Скачко, К вопросу о колонизации окраин. «Жизнь национальностей», 1923, М., кн. 2, с. 17. 内戦期にカザフ人のステップへ農民が押し寄せ，土地を占拠していた。19年末から20年初めには，カザフスタンの北方，さらにシベリアからもセミレーチエ地方へ農民の大量の移住＝流入があった。Г. Ф. Дахшлейгер, Социально-экономические преобразования в ауле и деревне Казахстана, Алма-Ата, 1965, с. 78, 91. プルジェヴァリスク郡ではスィル・ダリア州の住民が押し寄せ，トクマク郡では「他の諸郡」の移民が，原住キルギス人の土地を占拠したのである。«Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 257, с. 227, 228.

31) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 2, с. 33.

32) Там же, № 2, с. 32–33.

33) Там же, № 2, с. 32–33. Г. Ф. Дахшлейгер, Указ. соч., с. 96–97.

34) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 2, с. 21.

35) 内戦の終った1920年夏に，入植農民とムスリム定住農民の経営格差は歴然としている。ヴェルヌイ郡では一経営当り入植農民の播種面積は，4～10 d. に平準化したのに対し，ムスリム農民の経営の6割は0.5～3 d. のところにあった。Там же, № 3, с. 35.

36) Там же, № 2, с. 34.

IV. 入植農民の社会的行動

植民地セミレーチエのソヴェト権力は移民社会を基盤としていた。この社会的基盤を共通とする共産党と左派エス・エルの合同，そして一党制政治システムの形成の下で，入植農民を主体とする農民革命も展開した。だが，植民地の移民社会は，一党制政治システムを担う共産党とソヴェト権力に全く一体化していたのではなく，その政策を受容しつつ，反撥もし，自立（律）的に対応したのである。移民社会のこの自立（律）性は，政治の場では，無党派農民代議員のソヴェトへの輩出と，彼らの希薄な党派性，政治的浮動性となって現れた[1]。また，ソヴェト権力と共産党の政策を越えて，原住民の

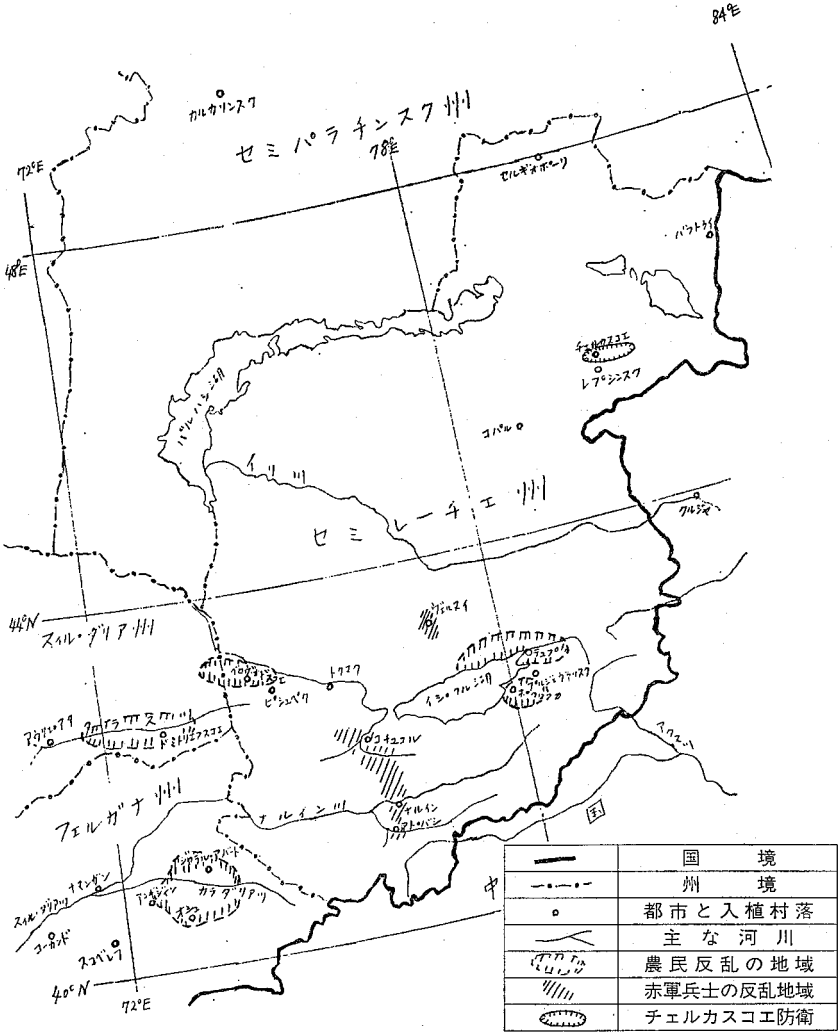
土地を占拠し，穀物調達に反撥し，自家消費的範囲に生産をとどめようとする農民の社会的行動ともなった[2]。これは植民地社会に於ける移民＝入植者の，いわば“スチヒーヤ стихия”の発現であった。

この自立（律）性 стхийность は，内戦期の移民＝入植者の一連の社会的行動にも窺える。ベロヴォードスコエ村をはじめとする入植村落での農民反乱，チェルカスコエ村を中心とする農民軍の戦い，州都ヴェルヌイでの赤軍部隊の反乱などである。(地図2参照)

1918年夏からトルケスタンでは，ソヴェト権力の穀物徴発へ反撥する農民の行動がはじまり，その最大のものが，セミレーチエ州ピシュペク郡のベロヴォードスコエ村を中心とした農民反乱であった。18年12月初めから，この地方の入植村落では，スホードが開かれ，そこで選出された代表はベロヴォードスコエ村へ赴いた。12月7日に，この入植村落で，ピシュペク郡と隣りのアウリエ＝アタ郡（スィル・ダリア州）の村落代表者の会議が開かれ，反乱の司令部となる軍事＝人民評議会 военно-народный совет が組織された。その議長には，ピシュペク郡ソヴェトのメンバーで左派エス・エルのブラゴダレンコ П. Благодаренко が就き，反乱の武力を成した人民軍 народная армия の指揮は，サドヴォエ村の農民で左派エス・エルのガリュータ Галюта が執った。反乱の宣伝相の役割を果したのは，ソクルク村の司祭トカチョーフ Ткачёв であった。反乱を起こした農民は，穀物徴発の徹回を求め，12台の食糧を積んだ荷馬車を襲い，これを守る11人の赤軍兵士を虐殺した。チュー川の渡し場を警備していた2人の赤軍兵士は銃殺され，川に放げ捨てられた。二人のソヴェト活動家も落命した。反乱のなかで，この地方からソヴェト権力は一掃され，「自治ベロヴォードスコエ郡」の形成が宣言され，この地域は一時的に「ベロヴォードスコエ集会ソヴェト Совет Беловодского митинга」によって統治されたのである。叛徒農民は，12月14日に郡市ピシュペクの西部を占領する勢いを示したが，やがて駆けつけた赤軍部隊の反撃にあい，26日に反乱の拠点ベロヴォードスコエ村を占領され，翌年1月1日までに鎮圧された[3]。

20日間に及ぶこの農民反乱は，18年夏から秋にかけて隣りのアウリエ＝

地図2　セミレーチエ地方の入植農民の行動 (1918～1920年)



アタ郡タラス川流域のドミトリエフカ村を中心とする農民反乱[4]を引き継ぎ，1919—20年に内戦から解放された地域で新たに導入された穀物徴発に抵抗する農民の行動[5]に連なる，一環を成していた。共産党との合同を拒んだピシュペク地方の左派エス・エルが，反乱において大きな組織力を発揮した

とはいえ[6]，この反乱を左派エス・エルが指導し，入植地のクラークが主体となった反革命暴動として整理することはできない。この反乱は，入植地の村・郷スホードに結集して土地を確保しつつ自らの革命を推進する農民の，ソヴェト権力に対する抗糧の闘争であり，直接的な集会民主主義を基盤に，彼ら入植民の自立した郡を形成する試みであった。反徒農民のイデオロギーは明示されることはなかったが，キリスト教信仰に浸潤する入植村落で反乱は展開し，反ムスリム的性格を帯びたものであった。「黒隊 черный отряд」を率い，農民を反乱へと駆りたてたのが村司祭トカチョーフであり[7]，また，原住民のなかで活動していた民族人民委員部の三人のムスリム活動家が，反乱のなかで反徒に殺されたのである[8]。

反乱をおこした入植農民の思想は，19年3月の第二回州ソヴェト大会のマリーニン Л. Малинин (左派エス・エルのフラクション代表) の発言に反響をとどめていた。彼は，ソヴェト権力への党派の介入を批判し，その「人民性 народность」と「無党派性 беспартийность」を求め，農業集団化を非難し，原住キルギス人の「自決権」に強い不信を示し，それを拒否したのである[9]。だが，左派エス・エルと共産党の合同が進み，左派エス・エルのソヴェトでの発言はこれが最後となった。左派エス・エルの政治的回路を通して農民の自立（律）性発見の道は閉されたのである。19年7月にプルジェヴァリスク郡をとらえた農民反乱は，もはや左派エス・エルの政治的組織力ではなく，コサックの武力に誘発されて進展することになる。

19年夏のプルジェヴァリスク郡は緊迫していた。5月28日に，郡と市に非常事態 осадное положение が布告され，全権力は郡防衛作戦＝政治司令部に移された。この布告は，ドゥンガンとタランチが中国国境から同郡へ進入しようとしているとの情況判断に基づいていたが，1916年ムスリム蜂起の際，入植者がドゥンガン，タランチを虐殺したことへの彼らの報復を警戒してのことであった[10]。入植民の社会は1916年の報復に怯えたのである。さらに，6—7月のソヴェト権力の入植民に対する措置も，彼らを緊張させるに十分であった。6月18日に，土地を実際に用益するものへ1 d. 当り2ルーブリの課税が命じられたが，これは原住民の土地を占拠し耕作する農民への

課税を含意した[11]。7月半ばには，不法な土地占拠には播種地と菜園を除いて，建物を徹去し，入植農民の播種地と家畜も記帳することが命じられている。入植農民は家畜の中国領への隠匿や，播種地の過少申告でこれらの措置に対応した[12]。しかし，このようなソヴェト権力の側からの政策に対して，ポクロフスコエ村やチュプロ・クリュチェンスコエ村などでは，「クラークの制圧 засилье кулаков」と呼ばれる状況が生れた。共産党の細胞が組織されず，ソヴェト権力の支配が及ばない状況が既に生れたのである[13]。入植村落では，農民の自立（律）化が著しく進展していたのである。

こうした6—7月のプルジェヴァリアスク郡の緊迫した情状のなかで，突然，中国領からコサック軍騎兵が侵入し，7月20日に郡市プルジェヴァリスクを包囲し，市の一部を制圧し，5日間の戦闘が続いた。これは26日には撃退されたが，コサック部隊が占領したトュプ（プレオブラジェンスコエ）村では，26日に村住民が彼らをパンと塩で歓迎した。こうして農民の反乱は始った。反乱はトュプの他に，イシ＝クル湖岸の一連の入植村落をとらえる大規模な農民反乱となった。反乱の中心となったトュプ村では，7月30日に判徒農民は鎮圧され，150人が捕えられ54名が銃殺された[14]。イシ＝クル湖岸の農民は，コサック部隊の侵入と郡市の包囲を契機に，ソヴェト権力からの自立（律）性を一挙に反乱へと昂進させたのである。

農民の自立（律）性は，このような農民反乱のなかに顕著にみられたが，それは各地でつくられた農民軍の行動のなかにも読みとれる。セミレーチエ州の入植地の農民の武装化は，1916年のムスリム蜂起に対処して始まり，出征兵士が武器を携帯して帰還したことによって顕著な現象となった。入植農民は辺境植民地の圧倒的なムスリム社会のなかで，自らの村落を守るために各地に農民部隊を編成した。セミレーチエ州では，チェルカスコエ防衛 Черкасская оборона として知られる，彼らの戦いがある。

1918年夏にレプシンスク郡の入植村落では，コサック軍とアラシュ＝オルダのカザフ人部隊から村を守るため，農民は自衛隊 отряды самообороны を編成しはじめた。この地方が内戦に突入するなかで，反革命側の攻勢におされ，ソヴェト権力は郡市レプシンスクを捨て，チェルカスコエ村へ疎開し

た。18年9月10日に，ここに軍事評議会が設置され，翌年10月半ばに降伏するまで，反革命コサック軍の包囲と戦うことになった。チェルカスコエ防衛を戦ったこの地域には，12の入植村落と2つのカザフ人集落アウルが含まれていたが，ここは，レプシンスク郡の入植農の過半が集中する入植民の拠点地域でもあった[15]。このチェルカスコエ防衛のなかで，ソヴェト側の主力として果敢に戦った農民部隊が，軍事行動において示した農民的性格と，キリスト教的倫理観は，彼ら入植農民の自立（律）性を示すものといえよう。農民部隊は，自らの入植村落の防衛を専らとし，他地域への転戦や攻勢には消極的であり，軍事作戦行動も農業の季節性に影響されたのである[16]。また，降伏を前にしてアンネンコフ軍との和平交渉のため，19年10月10日に作成された「軍使への訓令」には，キリスト教の倫理・世界観に裏づけられた，入植農民の思想が読みとれる。この「訓令」では，和平条件として，戦う双方がただちに武装解除し，レプシンスク郡に「中立」を宣言し，コサックと農民のあいだで穀物と資産を分配し，各郷で「自らの判断に従って」土地問題を解決することが決められていた。さらに，この「訓令」の結びの部分で，イエスを最初の「社会主義者」とし，その「至聖なる言葉」の実現を求めつつ，「全てのものが互いに愛し合い，互いに助け合わねばならない」社会を，彼ら入植農民は希求していたのである[17]。ここには，郷村共同体で，外には「中立」を表明しつつ，「自らの判断に従って」土地問題の解決をめざす，キリスト教の愛と扶助を旨とする農民の，自立（律）的な世界が浮び上ってくる。

セミレーチエ州では農民軍の自立（律）性は，チェルカスコエ防衛にみられるように，ソヴェト側につきつつ発揮されたが，隣接するフェルガナ地方では，それは反ソヴェト行動にまで行きつめている。ロシア人入植者は，アンヂジャン，オシュ郡でも，キルギス人の土地を占拠し，襲来するバスマチ部隊に対して自衛隊を組織していた。19年5月に，この農民軍の指揮をモンストロフ K. Монстров が執り，バスマチ部隊との協定を結ぶにいたった。モンストロフの農民軍は，ジャラル・アバート地区を拠点に穀物独占＝割当徴発に反対し，ソヴェトとその執行委員会全ての改選，出征農民兵の帰還な

どを要求し，9月8日にオシュ市を占領し，アンヂジャン市を包囲する勢いを示した。しかし，この農民軍の反乱はやがて敗退し，翌年1月には，ソヴェト側に投降し鎮圧された[18]。モンストロフ農民軍は，宿敵バスマチとも協定して，ソヴェト権力の政策と支配を覆すまでに，その自立（律）性を昂進させたのである。

入植農民の自立（律）性は，植民地セミレーチエで編成された赤軍部隊にも確実に浸透していた。この地域から召集された兵士は，第一次大戦のなかでも郷里の入植地での営農に心を引かれ，植民地鉄道のロシア人労働者とともに，トルケスタンの革命の担い手の一つであった[19]。内戦のなかで新たに編成された赤軍部隊も専ら農民から成り[20]，入植地の農民世界の雰囲気に深くそまっていた。1920年6月12日から20日まで，州都ヴェルヌイで生じた守備隊兵士の反乱は，植民地の赤軍部隊に浸透した農民のこの自立（律）性を明瞭に示しているのである。

ヴェルヌイの守備隊兵士の反乱の直接の契機となったのは，6月2日付のトルケスタン戦線司令部の，セミレーチエ赤軍部隊のタシケント，さらにフェルガナ地方への転戦命令であった[21]。この命令は，6月初めのトルケスタン戦線政治部活動家会議の決定に裏づけられて出された。この決議は，セミレーチエ州に関して，共産党は「クラーク，都市の俗衆，様々な偶然的分子の寄せ集め」であり，「クラーク」がソヴェト権力の名の下に勝利し，その支配を強化したと判断し，セミレーチエの根本的改革のためには「クラーク」から成る赤軍部隊の転出が不可欠とのべていたのである[22]。6月12日に始った反乱は，赤軍の守備隊兵士全体をとらえ，これにヴェルヌイ市の共産党組織も合流した。近隣の農村からは，反乱兵士に加る住民が集まりはじめた[23]。反乱を鎮圧するために，ピシュペク市に司令部が置かれ，非常事態が宣言され，ヴェルヌイへ通じる峠には反乱の波及を防ぐため警備隊が配置された。結局，鎮圧部隊は6月19日にヴェルヌイへ入り，20日には反乱は鎮圧されたのである[24]。

6月2日の転戦命令が反乱の直接の契機となったが，この反乱の背景には，さらに三つの基本的な状況が存在した。まず第一に，セミレーチエの赤軍部

隊の社会的性格である。この地方の赤軍部隊は，入植農民を主体に，18年10月の4千3百から20年1月には1万余へと倍増したが，その「規律化」は進展せず，いわゆる「パルチザンシチーナ партизанщина」に染まっていた。赤軍部隊では司令部の選挙制，作戦問題の部隊会議や集会での審議が行れていたのである[25]。植民地セミレーチエの赤軍部隊は上から，中央からの規律化よりも，下からの入植地農民の雰囲気を反映する気風と軍制が優越していたのである[26]。このような赤軍部隊へ出された転戦命令は，彼ら兵士の「住み慣れた土地から離れたくないという利己的心情」に裏づけられて，セミレーチエ兵全員の帰郷要求[27]，任命制の革命委員会にかえての選挙制，革命軍事委員会の廃止などの要求を提出させることにもなった[28]。第二に，反乱を生んだ状況として，セミレーチエ地方へ穀物独占の導入が噂され，入植村落に緊迫した雰囲気が漂い[29]，それに農民から成る赤軍兵士も感染していたことである。反乱を起こした守備隊兵士は，食糧割当徴発の廃止を強く求めたのである[30]。第三に，反乱の背景として，この地方の入植農民と原住ムスリムの間での鋭い民族的敵対を指摘しなければならない。反乱鎮圧を指導したフルンゼ M. B. は，6月20日付の革命軍事評議会への電文のなかで，1916年蜂起の「反響」が強く現れ，「鋭い民族的敵意」が存在したこと，さらに「キルギス人が，以前は彼らのものであったが，農民が一時的に占拠し，事実上用益している土地へ戻ってきたこと」を，反乱の背景として，まず最初に指摘していた[31]。従って，このような緊迫した民族関係のなかで，反乱軍はムスリム部隊の解隊を求めると共に，自分達セミレーチエ出身兵士全ての帰郷を求めたのである[32]。このような反乱の背景をフルンゼは，6月12日付でレーニンに「継続している鋭い民族的敵対を土壌にして，穀物独占を実施するとの噂が飛び交っただけで，住み慣れた土地から離れたくないという利己的心情に専らとらえられて，6月12日夜，ヴェルヌイで武装蜂起がおきた」と，反乱の第一電を打った[33]。Г. サファーロフは，このヴェルヌイの赤軍部隊の反乱を，そのスローガンは「中央に反対！」であったと述べ[34]，そこに入植民の社会に根ざした反乱の地方的性格をみたのである。

1920年11月にナルィン地方をとらえた赤軍部隊の反乱も，このようなセ

ミレーチエの入植農民から成る赤軍部隊の性格によるものと思われる。11月5日にアトゥバシの第五国境連隊から反乱がはじまり，叛乱兵士は7日にナルィン市と同地方を制圧した。叛徒は，さらにトクマク，ピシュペク方面へ進軍したが，敗退し19日に中国領へ潰走した。反乱のなかで，ソヴェト機構が廃止され，郷村制とゼムストヴォ参事会の復活，商業の自由が宣言された。ナルィンの共産党メンバーは逮捕され，党委員会議長のムサバーエフ X. Мусабаев，郡政治ビューロー長オロズバーエフ C. Орозбаев らムスリム共産主義者は殺されている。そして，農民には共産主義者と闘うことが呼びかけられたのである[35]。この二週間に及ぶ赤軍部隊の反乱のなかに，セミレーチエ州で実施された穀物の国家独占と割当徴発に反発し，ムスリム原住民に敵対的な農民の雰囲気の反響，そして赤軍兵士への感染を読みとることができる[36]。

内戦へのセミレーチエ州の突入のなかで，入植農民は自らの農民革命を実現しつつ，ソヴェト権力と共産党に対しても，農民反乱，農民部隊の行動，さらに赤軍兵士の反乱を通して，彼ら入植農民の自立（律）性を発現させたのである。彼らのこの自立（律）性は，農民世界への外部，とりわけムスリム世界からの脅威，ソヴェト権力と党の上から，中央からの政治的圧力に受動的に反応するなかで，植民地の彼らの様々な行動のなかに，自らの跡を刻印したのである。

注

1) 18年春のトルケスタン地方第5回ソヴェト大会で，多くの農民無党派代議員は，支持政党をかえ揺れ動いている。П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 76. 18年秋の第一回セミレーチエ州ソヴェト大会でも，農民代議員の政治的流動性は顕著である。Там же, 114-5.

2) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917-1920 гг.» № 130, с. 129-130; «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 2, с. 33.

3) Г. Сафаров, Колониальная революция. с. 90; История Киргизии, т. II. Фрунзе, 1956, с. 78-80; П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 125-133: «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917-1920 гг.)», с. 19-20; № 174, с. 162-3.

4) Т. Р. Рыскулов, Избранные труды, Алма-Ата, 1984, с. 14; П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 120; «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», с. 19, док. № 90, с. 94, № 126, с. 124–5.

5) Очерки истории Коммунистической партии Казахстана. Алма-Ата, 1963, с. 184, 190–191; «Социалистическое строительство в Казахстане в восстановительный период (1921–1925 гг.)», сб. док. и мат., Алма-Ата, 1962, № 30, с. 71, прим. 23.

6) 反乱指導者の一人ブラゴダレンコは，共産党との合同を支持せず，ピシュペク郡ソヴェト執行委員会から追放されていた。А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизии (Северная часть), с. 31. 郡ソヴェト執行委員会の副議長アガフォンツォフ Агафонцов をはじめとする左派エス・エルもこの反乱に加っていた。П. П. Никишов, Из истории краха…, с. 126.

7) А. Зорин, Эпизоды из истории гражданской войны в Киргизии, «Борьба классов», 1936, № 9, с. 46. タラス川流域のドミトリエフカ村を中心とする反乱でも，司祭フィヴェイスキー Фивейский が指導者として現れていることに注目されたい。«Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», прим. 30, с. 373.

8) П. Н. Никишов, Из истории краха…, с. 100–102.

9) Там же, с. 155–7.

10) «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)» № 224, с. 202–3.

11) Там же, № 233, с. 208–209; № 237, с. 211–3.

12) Там же, № 246, с. 219.

13) Там же, № 245, с. 218.

14) Там же, с. 21. № 251, с. 222–3, прим., 45., № 257, с. 227, с. 289–290: История Киргизии, Т. II, с. 87.

15) С. Н. Покровский, Черкасская оборона. «Вопросы истории», 1947, № 11, с. 31, с. 35–6.

16) Там же, с. 43.

17) Там же, с. 47. カザフスタンの革命史研究の大家ポクロフスキーは，ここに，「政治的未熟性」を読みとるのであるが，「軍使への訓令」に戦う入植農民の世界観を読みとり，評価することも必要であろう。

18) Г. Сафаров, Колониальная революция…, с. 103; А. Зорин, Эпизоды. Из истории гражданской войны в Киргизии. «Борьба классов», 1939, № 9, с. 49–55.

19) 拙稿「中央アジアに於けるムスリム蜂起と革命—セミレーチエ地方を中心に (1916～1917 年)—」100 頁, 注 41), 43), 104 頁, 参照。

20) 19年4月にコルチャークの参謀本部に送られた秘密報告では，セミレーチエ戦線について，「赤軍の主要な部分はトルケスタンの狙撃兵であり，これは戦闘に慣れ，規律ある老成の兵士である。彼らは農民の出である」と指摘している。«Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 215, с. 195. セミレーチエ州では内戦期に，赤軍のなかに原住ムスリムの部隊もいくつか編成されたが，赤軍部隊は基本的に移民＝入植者から成っていた。トルケスタンとシベリアの「異族人」にロシア人と同じ兵役義務が布告されるのは，内戦も終る1920年5月10日のことである。Декреты Советской власти,т. 8, М., 1976, с. 175–6. この兵役には，現在のソ連の文献がのべているようにムスリム住民がすすんで応じたのではなく，彼らムスリム新兵の殆んどは脱走し，バスマチにさえ加ったのである。С. Муравейский, Очерки по истории революционного движения в Средней Азии. Ташкент, 1926, с. 35.

21) М. В. Фрунзе, Избранные произведения. Т. I, М., 1957, с. 328,

22) Г. Сафаров, Колониальная революция…, с. 117.

23) М. В. Фрунзе, Избранные произведения. Т. I, с. 326.

24) История Киргизии. Т. II, Фруунзе, 1956, с. 103–4; «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 354, с. 322.

25) С. Н. Покровский, Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Семиречье. «Вопросы истории», 1947, № 4, с. 77–78.

26) 19年に戦線を飛行機で突破してセミレーチエへ共産主義者シャヴローフ Шавров А. А. が到着した。到着して4日後に，教会で開かれた5千人のセミレーチエ赤軍兵士の集会で，彼は糾弾され殺された。中央から任命された戦線司令官として，彼は今後，司令部の選挙制を許さないと表明したためであった。Г. Сафаров, Колониальная революция…, с. 107. 彼がセミレーチエ北部戦線のコパルに到着したのは19年6月3日で，ただちに軍政治コミッサールとして，中央ロシアの赤軍にならった軍の編成にとりかかっていた。«Иностранная военная интервенция и гражданская война в Средней Азии и Казахстане.», т. 1, Алма-Ата, 1963, № 448, с. 566; № 452, с. 570.

27) М. В. Фрунзе, Избранные произведения. Т. I, с. 325. この地方の出身で，反乱鎮圧を指揮したフルンゼは，「自分の村の近くに駐屯する特権」をもち，「どこであれ，自分の故郷から去るのを望まない」セミレーチエ赤軍兵士の気質を反乱の「土壌」として，強く意識していた。Там же, с. 328.

28) Г. Сафаров, Колониальная революция…, с. 117. 別の史料は，反乱兵士は「軍からの反革命将校の追放」，住民の武装化，銃殺の廃止を要求したと指摘している。«Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917–1920 гг.)», № 354, с. 322.

29) Там же, № 360, с. 327.

30) Там же, № 355, с. 324.

31) Там же, 20年春から初夏にかけて，ロシア人と原住民の対立が鋭化していることを別の資料も裏づけている。Там же, № 313, с. 283-4; № 339, с. 306.

32) М. В. Фрунзе, Избранные произведения. Т. I., с. 325.

33) Там же.

34) Г. Сафаров, Колониальная революция, с. 117.

35) А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизии, с. 38-39; «Великая Октябрьская соц. рев. и гражданская война в Киргизии (1917-1920 гг.)», № 396, с. 359; № 397, с. 360; № 402, с. 363-4.

36) ナルィン地方は行政的にはプルジェヴァリスク郡に属するが，政治的にはピシュペク，トクマクから影響を受けていた。20年夏以降，プルジェヴァリスク郡では帰還した5万人のキルギス難民への土地分与に直面していた。Там же, № 373, с. 340-341. また，トクマク地方では7月末の第三回共産党大会で，この地方の入植農民に対して「反クラーク」的政治姿勢が強く示されていた。Там же, № 370, с. 336-7. さらに，穀物割当徴発の実施はピシュペク地方を中心に緊迫した状況を生んでいた。Там же, № 372, с, 338; № 374, с. 341-2; № 380, с. 347-8; № 386, с. 352. 夏から秋にかけてのセミレーチエ南部のこのような複合的状況が，ナルィン地方の赤軍部隊の反乱の背景となったといえよう。

V. 土地改革

植民主義を批判し，1916年ムスリム蜂起以降，革命と内戦のなかでも継続した入植民による土地占拠を終わらせるための土地改革は，1919年末から翌20年夏に，トルケスタン共和国で提起されることになった。中央の全露ソヴェト中央執行委員会と党中央委員会から派遣されたトルケスタン委員会と，T. ルイスクロフらムスリム・コミュニストの積極的活動のなかで[1]，植民地に於る新しい土地改革の方針が確定していくのである。

すでに，19年12月にトルケスタン委員会と共産党トルケスタン地方委員会は，セミレーチエ州の事態を審議し，土地問題に於ける植民主義の一掃を確認している[2]。翌20年1月に相ついで開かれたトルケスタンの第三回共産党ムスリム組織協議会，第五回共産党協議会で，ルイスクロフらは党と共和国を「トルコ諸族共産党」「トルコ共和国」へ改編する決議を通過させた。これは中央アジアのトルコ諸族の統合と，その政治的イニシアチヴの実現を目指す政治的行動であったが，そこでは飢餓にあえぐ原住ムスリムを救済

し，植民主義と闘争することが当面の第一の課題とされたのである[3]。

トルケスタン・ソヴェト中央執行委員会議長という要職にあるルイスクロフらの党と共和国の改編を目指す政治方針は，20年2月以降，トルケスタン委員会からの強い反撃にあい，撤回を余儀なくされていくが，植民主義との闘争方針は，共和国農業人民委員アスフェンディアロフ С. Д. Асфендиаров に継承され具体的措置がとられていくことになる[4]。3月4日に，アスフェンディアロフら5人から成る委員会の報告をうけ，共和国ソヴェト中央執行委員会は「勤労ムスリム農民への土地返却に関する」布告を出した。この布告は，移民に勤労基準に基づく土地利用は認めつつ，非勤労経営からは土地を没収し，1916年ムスリム蜂起後に移民の手に渡った土地はキルギス人へ返却すると述べていた[5]。6月26日には，共和国農業人民委員部は共和国ソヴェト中央執行委員会へ宛て通達を発している。この通達はセミレーチエ州への移民入植が，トルケスタンの植民問題の元凶をなし，当州の土地問題は解決困難な状況にあると指摘し，次のように移民を厳しく閉ざす方針を伝えたのである。「現時局において，トルケスタンの領域へのどのような移住入植も不可能であり，移民は地方のソヴェト権力から恣ままに，何らかの援助を期待することはできない。逆に，必要とあれば，トルケスタンからの強制追放もありうる」[6]

ルイスクロフらムスリム・コミュニストのトルコ諸族を統合し，ロシアから自立したトルコ諸族の共和国と党を創出しようとする動きは，6月29日の党中央委員会の「トルケスタンに於る共産党（ボ）の基本的諸課題に関する」決定によって，最終的な敗北を蒙る[7]。だが，植民地における土地改革の方針は，この6月29日の決定のなかで確認され，次のような具体的指示となって現れた。

「a）移民局により設計区画された，あるいは移民により不法に没収されたキルギス人の土地は，勤労分与地の範囲内で移民のもとに残し，他は全て没収する。没収された土地は，キルギス人集落，アルテリ，個々人への土地分与のためと，1916年の惨禍を蒙ったキルギス，ドゥンガン難民の設営のためのフォンドとされる。農耕を行う原住民の経営への土地分与は，

ロシア農民との平等の原則のうえでなされる。牧民の経営には，遊牧路のみならず，定住農耕への移行を保障する畑地も確保されねばならない。この移行に際して，国家からの資金，農業技術の援助などがなされねばならない。

b） 土地なしのムスリム農民に土地を保障する。

c） クラークの全組織を粉砕し，彼らを武装解除し，彼らの指導のみならず，地方の権力組織化と経済再建へ影響力を与えるいかなる可能性も奪いとるために，再移住を広範に実施し，断固たる措置をとる。」[8)]

6月29日決定のこの土地改革に関する指示をうけて，翌21年春までに，トルケスタン共和国でも，キルギス（現カザフ）共和国でも，党とソヴェトのレヴェルで植民主義の一掃を目指す土地改革の方針が確定していった[9)]。この土地改革の方針は，21年3月の第10回共産党大会でも論議され，確認されることになる。大会で民族問題の基調報告を行ったスターリンに対して，副報告者のГ. サファーロフはトルケスタン，とりわけセミレーチエの植民問題に言及し，スターリンの提出した決議案にいくつかの修正を求めた。この修正要求は，専ら遊牧民に係わり，民族問題に一般化できないと，スターリンはつき放したが，スターリンのテーゼを原案にして採択された大会決議では，植民地のソヴェト権力とその土地政策を厳しく批判した見解が取り入れられたのである[10)]。民族問題に関する大会決議では，トルコ系3000万の住民のうち，定住民を除くカザフ，キルギス，バシキール，チェチェンなど1000万の遊牧民に対し，ロシアからの植民で土地を奪われ，死滅に向っている彼らの現状が指摘され，植民者クラークから土地を収用し，遊牧民に必要な土地を確保することが必要であると確認したのである[11)]。

中央と地方での土地改革へのこのような大きなうねりに連動して，セミレーチエ州でも改革実現に向けての準備がとられていった。20年11月10日に，共産党トルケスタン・ビュローは当州の党組織強化と土地改革準備のため，党とソヴェトの責任ある活動家を派遣すると決定し，12月初めに，レパ A. Лепа をはじめとする一団が送られた。レパは州党委員会の「責任書記

ответственный секретарь」に就き，党・ソヴェト機構の「健全化」，原住民共産主義者の抜擢登用，土地改革の準備にとりかかった[12]。すでに前年の12月15日に，州党組織の解散と党員の再登録が命じられていたが，これは植民主義に汚染された党組織を再建し，「ロシア人移民のあらゆる植民主義的欲望を完全に根だやしすることで民族的敵対を調整し，クラークの経済力を弱めること」を目指すものであった[13]。この粛党により，トルケスタンの中枢タシケント＝スィルダリア地方に次ぐ党組織を誇った当州も，20年末には党組織を17,912人から一挙に3,880人（内党員候補2,662人）へと激減させたのである[14]。さらに，土地改革へのロシア人クラークの抵抗を予想警戒して，州，郡，郷村のソヴェトは，非常権限をもつ革命委員会の地位を与えられた[15]。州革命委員会議長には，若きジャンドソフ У. К. Джандосов が就き，州党委員会書記レパと共に，土地改革へ向けての体制をつくったのである[16]。

植民地セミレーチエの土地改革は，このような準備過程をへて，21年2月4日の州革命委員会の「土地＝水利改革の実施に関する指令」によって始った。この指令は，1916—20年に不法に奪取された土地を，1921年春の農作業の始まりをもって原住ムスリム住民に返還することを命じた。さらに，「1916—18年のキルギス人冬営地の大規模な破壊」を考慮し，土地占拠者の全ての建物と播種地を没収し，遊牧路になされた大きな障害は取り除き，キルギス人の冬，夏，秋の牧地に定住非キルギス人が春に家畜を放つことを禁止した。そして，この指令は，「1916—21年に不法占拠者 самовольцы を出した開拓村，コサック兵村，都市は，彼らを逆に引き受け，1915年以前に開拓村に割り当てられた土地に入植営農させること」を義務づけた。農民は，開拓村，コサック兵村へ引き戻されたが，土地を占拠した都市住民には，1915年以前に雇用労働を用いないで農業に従事していた者にのみ土地への権利が認められた[17]。

続けて，州革命委員会は2月12日に，貧窮する原住ムスリムに，1916年以降占拠された土地の返却に関する法を出したが，この法で，原住民の土地の侵害・奪取の主体である「不法占拠者 самовольцы」は，二つに分別され

ていた。即ち，自らの分与地をもちながら「クラーク志向」のため原住民の土地を占拠したものと，自らの分与地をもたずに不法占拠に至ったものを区別し，前者は無条件に占拠地から追放となるが，後者は家財，農具・施設を持って，不法入植する前の村へ返戻されることになった。さらに，この法は，戻って来たカザス人にも追放されるロシア農民へも行政的配慮をはたらかすことを地方ソヴェトに求めていた[18]。4月25日には州党委員会が，原住のカザフ，キルギスの作男へロシア人村落の勤労規準に応じて土地を分与する具体的指示を与えた。この決定では，彼ら作男の耕作に入植農民クラークと原住民豪族バイの参加を強いつつ，彼らに建物，農具，種子，「十分なだけの播種地」を確保するため「あらゆる努力を傾けねばならない」と結んでいた[19]。2月4日の土地改革の基本方針を述べた指令に続いて，植民地セミレーチエの各住民グループに係る個別的措置と具体的配慮が指示されたのである。

1921年春にこのようにして着手された植民地セミレーチエ州の土地改革は，2年にかけて22年夏に終了する。この土地改革のなかで，入植農民の非勤労経営が一掃され，勤労規準を越え余剰と判断された分与地は移民＝入植者から収用され，原住民の土地と水の利用を侵害する土地・建物は除去された。1921—22年の両年で，移民から直接収用された土地は，セミレーチエ州で226,843 d. で[20]，この収用過程で，不法入植村落の一掃がはかられた[21]。この移民から直接収用された22万 d. 余の土地に，旧移民局の管理下にあった土地，コサック軍将校用地，修道院所有地を加えて，当州の土地改革フォンド1,039,771 d. が形成された[22]。この土地フォンドから，1921年に85万6,862 d. の再分配が行れたが，その80.2% が遊牧民の，16.8% がタランチ，ドゥンガンのムスリム農民の用益下に入った。土地改革で被害をうけたロシア農民へ分配された土地は，その2.3% にすぎなかった。1922年の土地フオンド18万2,909 d. は全て原住民の用益下に移された[23]。この土地改革のなかで，1916年ムスリム蜂起で中国に逃れ，再び帰郷したムスリム難民への土地割当ても行われた[24]。

このように，1921—22年のセミレーチエ州の土地改革は，22万 d. 余の土地を直接，入植民から収用し，この土地を含めて104万 d. の土地フォンドを

つくり，そこから専ら，ムスリム牧民と農民へ土地を返還，再分配するものであった。この土地改革は，帝政ロシアの辺境ステップ地域をとらえた反植民主義の土地改革の一還を，それも最大規模を誇る一つであったが[25]，植民地セミレーチエ州の植民史のなかで，この改革を位置づけると，その意義はいささか色褪せることになる。当州では，1916年のムスリム蜂起の前に，既に55万d.の優良地，7万d.の草刈場，200万d.の遊牧地が，原住牧民から収用されていた[26]。この1921—22年の改革で，入植者から直接収用された22万d.の土地は，帝政ロシアの植民の規模＝実態からみると僅かであり，しかも土地改革が，1916年ムスリム蜂起以降の不法な土地奪取の一掃に主眼がおかれていたこともあって，帝政時代の土地収用と植民の訂正にまで及ぶべくもなかったのである。

第二に，この土地改革が播種カンパニアと同時に進行したことも注目しなければならない。内戦から解放され，経済復興，農業増産を求めるネップ時代の播種カンパニアは，不法入植し土地を占拠した農民に，彼らの勤労権を認めつつ，播種とその成果の取入れを保障したが[27]，これは彼ら農民に土地用益の事実上の存続を容認することになった。ロシア人入植者が土地改革のなかで貧窮した原住民に対して示した，耕耘，播種の援助行為も[28]，彼ら農民の投下労働への保障と土地占拠の継続志向を強めたであろう。内戦の場となり，経済的荒廃の淵にたたされたレプシンスク郡では，22年3月に郡責任活動家会議が，土地問題と播種カンパニアの問題を審議し，「土地を自らの手で直接耕す農夫は，……土地を制限されてはならない」と決定し，できるだけ多くの土地に播種することが呼びかけられた[29]。播種カンパニアは，ネップの下で農民の土地への関心を高め，勤労権を強め，農民革命の成果を強固にするものであったが，セミレーチエをはじめとする植民地では，耕耘・播種した農民の土地用益の継続を促し，不法占拠地の原住民への返却を曖昧にし，土地改革の成果を減殺する方向に作用した[30]。

第三に，外部からの移民流入を禁止しつつ改革を実施するという，植民地の党とソヴェトの方針も[31]，中央政府が旱魃と，それに続く飢饉によって生じた飢餓移民の受入を，辺境植民地に強く求めることによって[32]，実質的に

効力を失った。飢饉に襲われたヴォルガ流域，カザフスタン北部から，21年に22万人の飢えた人々がトルケスタン地方に押し寄せたのである。トルケスタン共和国政府は最初，国境を閉鎖し，飢餓難民の流入を阻止しようとしたが，これを押しとどめることが出来ず，難民23,000人を公共事業に就労させる計画に転換した。だが，この計画も資金難にぶつかり，結局，押し寄せる難民は農民経営のなかに吸収されることになったのである[33]。ロシアを襲う飢饉が，農民を移民として押し出し，それが辺境の入植地での土地問題を鋭化させるという歴史的現象は，トルケスタンでも繰り返されてきたが，今回の飢饉と飢餓難民の流入も，土地改革の実現条件の一つである移民流入の阻止を大きく揺り動かし，土地改革の実施にブレーキをかける方向に作用したのである。

最後に，この土地改革が「突撃的 ударный」に遂行されたことに注目しなければならない。土地改革の開始を告げる，21年2月4日の州革命委員会の指令は，改革にともなう土地整理を「突撃的」に行うことを求めていた[34]。だが，この「突撃的」実施は，経済的混乱と困難を新たにもたらすことになった。州土地部の通報は，21年5月に，4月期の土地改革の実施状況にふれ，「大急ぎで，明確なプランを欠き，定った体制もなく」畑地の分与，役畜・農具の分配がなされ，それも僅かであり，従って，不法占拠者も，新しい原住民入植者も「まだ全く惨憺たる状態にある」と確認せざるを得なかったのである[35]。土地を与えられ，移り住んだ貧窮する原住民には，十分な経営力がなく，土地を放棄するか，バイ，マナープなど有力豪族の庇護下に入り，他方，追放された入植民は，十分な援助もえれず，営農の安定を奪われた。これらの結果は，播種地の一時的減少ともなった[36]。22年12月7日に，トルケスタン共産党中央委員会は，当州の党組織に「州の土地改革は，その突撃的な土地再分配の部分は終了した。しかし，我々が土地改革の結果の経済的強化と呼ぶ部分は未だ完了していない」と確認・指摘せざるをえなかった[37]。「突撃的」性格の土地改革は，辺境植民地に確かに「一撃 удар」を与えたとはいえ，経済果成果に直接結びつかなかったのである。

以上の諸点を考慮すると，植民地にセミレーチエでの土地改革は，中央ア

ジアで最大規模の一つであったとはいえ，その経済的成果は限られたものであったと言わざるを得ない。しかし，この土地改革が植民地社会に与えた社会的衝撃は甚大で，入植農民の反動，原住ムスリムの活性化と部族的結集を促し[38]，政治指導の揺れ戻しと党内闘争の醸成をきたすことになった。

植民主義への批判として始った土地改革は，入植農民の反動を引き起こさざるを得なかった。州革命委員会議長のジャンドソフは，21年4月15日付の電文で，入植農民による土地，建物，農具の引渡しへの様々な抵抗があったことを伝えている[39]。彼は，このような入植農民の反動のなかで，5月19日に各郡の革命委員会へ，土地をえたキルギス人と共に追放された不法入植者の経営安定が，当面の緊急重要課題であると指示したのである[40]。6月11日には，トルケスタン委員会議長ルズタークらによって，セミレーチエ住民へ「呼びかけ」が発せられている。このなかで，土地改革の意義は確認されつつ，同時に，改革は「あらかた終った」とされ，「全ての誠実なロシア人勤労者」へ土地を確保し，入植村落の徹去と移転は最小限にとどめると表明され，入植農民の安堵がはかられたのである[41]。入植農民の改革への抵抗と反動は，夏から秋の農作業期に一層，強まり，彼らは「自分の」土地と農具の実力による奪還，テロルも辞さなかった[42]。緊迫した状況が生れるなかで，共産党中央委員会はホッジャノフ C. Ходжанов を議長とする入植民追放委員会のセミレーチエからの召還を決定し，共和国農業人民委員アスフェンディアロフ，セミレーチエ州革命委員会議長ジャンドソフの責任を問うことを確認した。そして，10月14日には次のように決定指示したのである。

「今後，土地改革は原住民と外来住民，両グループの土地用益と水利の同権，原住民の土地への不法占拠を一掃することを目的として，原住民と外来住民の土地整理を通じて行れねばならない。その際，第一に旧開村へ移された不法占拠者と，奪われた土地を戻され新しく移り住んだ原住民の経営を安定させねばならない。」[43]

反植民主義への傾斜をもって始った土地改革の第一段階から，原住民と外来入植者の利害調整を強調する第二段階へ移ったのである。これは，21年夏—秋の入植農民の土地改革への反動のなかでの，政治的揺れ戻しであった

が，この揺れ戻しが，さらに加勢するのを止め，植民地に於ける土地改革の正当性を確認するために，党中央委員会は22年1月11日に，回章「トルケスタン共産党へ」を出さざるをえなかった。この回章は，少数派のロシア人が「『支配民族』の恥ずべき特権」をすて，共産党が「クラーク植民社会の影響」から浄化されることを求めつつ，次のようにセミレーチエの土地改革を支持した。

「トルケスタンに於ける新経済政策の実施は，ソヴェト権力の土地政策の再検討，例えば，キルギス住民に彼らの奪われた土地を返却したセミレーチエの土地改革の再検討に至るにちがいないと考えている同志たちの結論は，深い誤りであり，全く皮相である。これらの結論は，新しい旗を掲げた旧い植民主義であり，ソヴェト権力がクラーク農場主の債務奴隷へキルギス人を戻す準備をしていると，全く誤解している。ロシア共産党中央委員会は，早急な実施にあたり個々の誤りと手違いがありえたとはいえ，セミレーチエの土地改革を正しいものと認め，過去へのどのような復帰も許さず，トルケスタンにロシアのアルスターを，即ち『中央』の支持を期待する民族少数派の植民主義的フロンドをつくる試みに全く容赦ない打撃を与える。」[44)]

セミレーチエの土地改革は，このようにして，第一期の反植民主義の積極的推進の局面から，第二期のそれへの反動，さらに，この反動に対する土地改革の再確認の第三期を経て，1922年夏に，その終了が宣言された。22年8月31日に，全露ソヴェト中央執行委員会は，議長カリーニンと幹部会員ルズタークの署名を付して，「セミレーチエ州の住民へ」と題するアピールを発し，土地改革の終了を宣言した。このアピールは，ロシア農民が「去年と今年の土地改革の不公正さ」を一連の嘆願書で訴え，原住キルギス人は「ロシア農民による土地と農具の新たな不法占拠の企て」を非難していると指摘し，ロシア軍の支援をえて土地改革が中止となるとか，セミレーチエからロシア人全てが追放されるとかの「全く馬鹿げた噂」が飛び交ったと伝え，土地改革によって植民社会に引きおこされたロシア人と原住キルギス人の「非

常に不正常な関係」，緊迫した事態が生れたことを指摘した。そして，アピールは土地改革の結果は全く変更されることなく，没収資産の返却，追放された土地への復帰・再入植もないと述べ，土地改革の終了を宣言したのである。さらに，今後は入植地からの追放も行れず，土地整理は土地用益の強化と経営改善を目指し，「現存勤労経営の土地用益を切り取ること」は決してないと表明されたのである[45]。植民地セミレーチエの土地改革は，開き放たれたパンドラの箱を再び閉すかのように，政治的にその終了が宣言されたのである。22年8月から翌年春までに「勤労土地用益法」と「土地法典」が中央アジアのキルギス（現カザフ），トルケスタン両共和国でも採択され，その一州であるセミレーチエへも適用されることになった[46]。政治的に終結を宣告された土地改革は，法的整備を経て最終的に幕を閉じたのである。これによって，ロシア農民革命の理念，即ち勤労土地用益を辺境植民地でも民族の差別なく実現することを法的に確認したのであり，反植民主義のトーンは落ち，移民制限条項にその残影をとどめるものとなった。

土地改革の開始，揺れ戻し，政治的終了へと進む過程で，セミレーチエ州をはじめ中央アジアの共産党組織のなかで，党内闘争が醸成されることになった。中央から派遣され植民主義を批判する「中央派 центровики」への抵抗は，既に1920年に現れ，地方の党とソヴェトの「自己規制」を促していた。土地改革実施のなかでは，セミレーチエの党組織に，入植農民の追放に反対し，土地改革が階級的方針によってではなく，民族的方針で行れているとの非難が現れた[47]。22年1月11日の党中央委員会の回章「トルケスタン共産党へ」は，土地改革への反動のなかでその正当性を確認するとともに，「民族的隔離の諸傾向」，「党活動を破壊する争論や分派闘争」に警告を発し，その根絶と「全党員の協調一致した活動」を求めたのである[48]。同年3月に開かれた第2回州党協議会は，党組織が「一体 единое целое」を成していないと確認せざるをえなかった[49]。12月7日には，トルケスタン共産党中央委員会はジェトゥイス（旧称セミレーチエ）の党組織へ宛てた書簡のなかで，土地改革のなかで党内闘争が激化したことを確認し，次のように厳しく批判した。

「中央委員会は遺憾ながら，ジェトゥイスの党とソヴェトの上層部が，分派闘争，権力争い，部族的反目に夢中となり，まさにそのことにより，人民大衆が革命的高揚のなかで土地改革の第二段階，経済的安定の強化を成功裡に完了する好機を逸してしまったと確認せざるをえない。」[50)]

中央アジアの土地改革をめぐり醸成されたこのような党内闘争は，キルギス（現カザフ）共和国でも[51)]，トルケスタン共和国でも鋭いかたちをとった。トルケスタンでは，ネップの推進を主張し，入植農民の営農安定と農業の再建・増産を唱えるトムスキー M. Ф. Томский と，植民地での民族政策の厳格な実施を求めるサファーロフの政治的対立となった[52)]。セミレーチエでは，ネップへの移行は民族政策と土地政策の放棄であると主張する「左派警戒論者 левые паникеры」が登場したのである[53)]。セミレーチエ州の土地改革は，植民社会の対立を際立たせ，党内対立と闘争を醸成し，「突撃的」な反植民主義から，土地整理を通じての脱植民化の道へ転轍し，政治的な終結を宣告されたのである。

注

1) トルケスタン委員会とルィスクロフの活動に関しては，木村氏の論文がある。木村英亮「ソヴェト中央アジアにおける社会主義と民族主義—トルケスタン委員会とルイスクロフ」『史潮』新五号 1979年。
2) «Социалистическое строительство в Казахстане в восстановительный период», № 192, прим. 17. с. 280.
3) ルィスクロフはセミレーチエに隣接するスィル・ダリア州の，やはり植民が進められていたアウリエ・アタ，チェルニャエヴォ両郡の問題委員会（トルケスタン・ソヴェト中央執行委員会付属）の議長を務め，19年秋から，植民主義批判の鋭い論説を展開していた。T. Рыскулов, Избранные труды. Алма-Ата, 1984, с. 60, 69–70. ルイスクロフはトルケスタンの第三回党ムスリム組織協議会でも，ソヴェト権力のとるべき政策は，第一に飢餓と植民主義に対する闘争であると主張している。A. A. Гордиенко, Образование Туркестанской АССР, М., 1969, с. 281.
4) トルケスタン委員会メンバーのフルンゼが2月22日にタシケントへ到着して，ルイスクロフへの反撃が始まるが，翌23日の共産党トルケスタン地方委員会の会議で，土地問題が審議され，トルケスタン委員会のゴロシチョーキンの提案で，アスフェンディアロフら5人から成る委員会が，土地問題に関する規定の作成のために選出され

ている。«Социалистическое переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане», № 51, с. 106.

5) Там же, № 52, с. 106-7.

6) Там же, № 54, с. 109-110.

7) В. И. Ленин, ПСС. 5-е изд. т. 41, с. 153, 433-6; прим. 172, с. 545. 6月29日の決定のあと，ルイスクロフ派が多数を占めていたトルケスタン地方共産党委員会は，「党中央委員会決定の実施を阻げた」として，7月19日に解散され，再組織されることになる。А. А. Гордиенко, Образование Туркестанской…, с. 289.

8) «Социалистическое строительство в Казахстане в восстановительный период.», № 192, прим. 17, с. 280-281.

9) М. Ким, Октябрьская революция и аграрный вопрос в Казахстане. «Вопросы истории», 1947, № 10, с. 100; Р. Х. Аминова, Аграрные преобразования в Узбекстане в годы перехода Советского государства к НЭПу. Ташкент, 1965, с. 77-79: Очерки нстории Коммунистической партии Казахстана. Алма-Ата, 1963, с. 208; «Социалистическое переустроиство сельского хозяйство в Узбекстане (1917-1926 гг.)», Ташкент, 1962, № 56, с. 111-113.

10) Десятый съезд РКП(б). Стенографический отчет. М., 1963. с. 212-3, 487-490.

11) Г. Сафаров, Колониальная революция. М., 1921, с. 145-6.

12) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья. 1921-1925 гг.», № 88, с.152-3.

13) В. П. Николаева, Турккомиссия как полномочный орган ЦК РКП(б). «Вопросы истории КПСС», 1958, № 2, с. 82. 19年末から20年にかけてのこの党は，トルケスタン地方でとりわけ植民主義の強かったタシケント第三鉄道区，フェルガナ地方，そしてセミレーチエ地方で行れた。«Резолюции и постановления съездов Коммунистической партии Туркестана (1918-1924 гг.)», Ташкент, 1968, с. 69.

14) 木村英亮「ソビェト中央アジアにおける社会主義と民族主義」21頁。

15) Р. Х. Аминова, Аграрные преобразования…, с. 84-5.

16) История Казахской ССР с древнейших времен до наших дней. Т. IV, Алма-Ата, 1977, с. 282.

17) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 87, с. 148-152.

18) М. Ким, Окябрьская революция…, с. 100-102.

19) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 104, с. 163-4.

20) セミレーチエ州の土地改革の規模は研究者によって，まちまちである。1922年12月に州経済会議が作成した資料に基づくと，1921年に一掃された非勤労経営127，土地

面積にして 2,379 d., 1922 年にはそれぞれ，1,341 経営 12,524 d. であった。また，原住民の水利と土地利用を防げるとして，1921 年に 15 ケ村，257 経営，14,945 d. が，1922 年には 54 ケ村，2,833 経営，148,977 d. の移民村落が分散・撤去された。さらに，入植農民から余剰地として没収されたのは，1921 年に 26,610 d., 22 年に 21,408 d. であった。Там же, № 141, с. 221–2. 結局，1921 年に 43,934 d., 1922 年に 182,909 d., 両年合わせて 226,843 d. の土地が，移民入植者から直接収用されたのである。

21) 一掃された入植村落の数に関しても，史料によって異っている。1924 年 1 月のトルケスタン共和国第 12 回ソヴェト大会に提出された調査書は，同州でロシア人の不法入植村落 110，フートル 51，出作り地 заимка 95 が一掃されたと述べている。«Социалистилеское переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане (1917–1926 гг.)» № 111, с. 216–7. だが，1925 年 11 月のジェトウイス (1922 年にセミレーチエはこう改名した) 県党委員会の報告は，45 村落が一掃されたとしている。«Социалистическое строительство в Казахстане в восстановительный период (1921–1925 гг.)», № 3, с. 22.

22) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 141, с. 222.

23) Та мже, № 141, с. 222–3.

24) 1921 年夏までに，セミレーチエ州に，中国領に 2 万人弱を残しながらも，24 万人の難民が既に戻ってきていた。プルジェヴァリスク，ピシュペク郡では，不法占拠者を追放し，そこに帰郷した難民の土地割当が行れている。Там же, № 119, с. 180–181.

25) トルケスタンの他の州でも土地改革は行れたが，その規模は数千 d. にとどまっている。Р. Х. Аминова, Аграрные преобразования…, с. 80. «Социалистическое переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане (197–1926 гг.)», № 80, с. 154; № 91, с. 181–2. カザフスタンの北部ステップでは，旱魃・飢饉にみまわれ，その対策におわれ土地改革の実施ではなく，その準備作業にとどまったのである。Г. Ф. Дахшлейгер, Социально-экономические преобразования в ауле и деревне Казахстана (1912–1929 гг.). Алма-Ата, 1965, с. 159, с. 164.

26) «Социалистическое строительство в Казахстане в восстановительный период», № 238, с. 335.

27) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 106, 165.

28) Там же, № 116, с. 176.

29) Там же, № 127, с. 194.

30) この点で，当州に隣接するフェルガナ州ジャラル・アバード地区の土地改革の経過は興味深い。この地区は，ロシア人農民の入植が盛んに進められ，嘗てモンストロフの農民軍が跋扈したところであるが，ここからスィル・ダリア州に追放されたロシア人農民は，自分の穀物の取入れのため再び戻ることを許された。その後，彼らの追放は有耶無耶にされたのである。«Социалическое переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане (1917–1926 гг.)», № 102, с. 198.

31) 1921—22年の土地改革の準備，実施，終了のどの局面においても，外部からの移民を閉ざすというのが一貫した公的立場であった。Там же, № 54, с. 109–110; № 83, с. 116; № 100, с. 194.

32) 1921年1月1日に，レーニンは農業人民委員セレダー С. П. Середа に書管を送り，そこで，移民の問題にふれ，シベリア革命委員会議長スミルノーフ И. Н. Смирнов は提案された移民総数の内，わずか10万人だけ受け入ることができると述べ，キルギス（現カザフ）共和国人民委員会議議長ラドウス＝ゼニコヴィチ В. А. Радус-Зенькович は移民の受け入れ一般を拒んでいると伝えた。そして，レーニンはセレダーにラドウス＝ゼニコヴィチとその日に交渉し，カザフスタンの移民受入れ数を決定することを提案していた。Ленинский сборник. XXXVII, М., 1970, с. 277. 中央政府はシベリアとカザフスタンへの移民受入れへに政治的圧力をかけたのである。

33) J. Castagné, Le Turkestan depuis la révolution russe (1917–1921). *Revue de monde musulman.* no. L (June 1922), pp. 72–73. Ш. З. Уразаев, В. И. Ленин и строительство советской государственности в Туркестане, Ташкент, 1967, с. 355.

34) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 87, с. 152.

35) Там же, № 114, с. 174.

36) «Социалистческое пореустроиство сельского хояйства в Узбекстане (1917–1926 гг.)», № 111, с. 216–7.

37) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 143, с. 226.

38) ムスリム牧民への土地返還が行れるなかで，バイ，マナプを中心とする牧民の部族的結集も強められた。この部族的結集は彼らの社会に伝統的な部族紛争 родовая борьба を引き起こしている。22年春に山地州 горная область の新設をめぐって，ソルト族とサルィバギシュ族の対立が鋭化し，結局，山地州の創設は見送りとなった。История Киргизии, т. II. Фрунзе, 1956, с. 128.

39) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 3, с. 162–3. 入植民の土地改革への抵抗に関しては，次の文献も参照されたい。А. Н. Зорин, Революционное движение…, с. 40: Г. Ф. Дахшлейгер, Социалью-экономические преобразования…, с. 146, 160.

40) М. Ким, Октябрьская революция…, с. 102.

41) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 118, с. 177–8. ルズターク Я. Э. Рудзутак は，第二次トルケスタン委員会（20年7月～22年8月）の成員であり，М. Ф. トムスキーと共に議長も務めた。

42) Р. Х. Аминова, Аграрные преобразования… с. 102–3; «Социалистическое переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане (1917–1926 гг.)», № 86, с. 169.

43) Очерки истории Коммунистической партии Казахстана, с. 211.

44) «Жизнь национальностей», № 3, 26 января 1922 г.
45) «Жизнь национальностей», № 18 (153), 11 сентября 1922 г.
46) «Социалистическое переустроиство сельского хозяйства в Узбекстане (1917–1920 гг.)», № 90, с. 174; № 100, с. 194; «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 134, с. 207.
47) А. Н. Зорин, Революционное движение…, с. 40.
48) «Жизнь национальностей», № 3, 26 яньаря 1922 г.
49) А. Н. Зорин, Революционное движение…, с. 44–5.
50) «Советское строительство в аулах и селах Семиречья», № 143, с. 227.
51) キルギス (現カザフ) 共和国でも，1921—22年の土地改革のなかで党内闘争が激化した。民族主義者は《キルギス会議》を召集し，植民主義との闘争を前面に出した。これに対し，大ロシア覇権主義者は，ウラリスク，クスタナイ両県の共和国からの分離とロシアへの併合を求めた。22年2月の共和国党委員会総会には，T. ルイスクロフの民族問題に関するテーゼが提出され，これをめぐり鋭い対立が生じた。Очерки истории Коммунистической партии Казахстана, 1963, Алма-Ата, с. 200–203.
52) Г. Ф. Дахшлейгер, Социально-экономические преобразования…, с. 149–151.
53) Р. Х. Аминова, Аграрные преобразования…, с. 53.

結びにかえて

セミレーチエ州の植民と革命が提起した問題は，南シベリアから南ウラル，中央アジア，コーカサス，クリミア半島に及ぶ帝政ロシアの広大な辺境植民地に共通する歴史的論点でもあった。革命と内戦のなかで辺境民族地域に成立したソヴェト権力と，それを支える共産党は，基本的に外来入植者を社会的基盤としていた。ここでは，入植農民を主体とし，反地主の社会的契機を欠如し，勤労用益実現の名の下に原住民の土地への侵害も辞さない農民革命が展開した。たが，辺境民族地域における革命の構造，その「並存性」に規定されて，1920年からもう一つの土地革命への胎動が始まり，1921—22年の土地改革となった。植民地に於ける土地革命は，ロシア中央部の農民革命と異なり，反植民主義の急進的改革として始まり，植民地社会の対立と党内闘争を醸成して，移民と原住民に平等な土地用益を認める土地整理へと落着した。植民地の土地革命は，反植民主義から脱植民化へトーンを落して終了したのである。

セミレーチエを含む中央アジアの植民と革命の問題は，1921—22年の土地

改革と1924年の民族境界区分＝国家再編で，一応の結着をみた。とはいえ，1920年代には，この土地改革の成果を問い質す反植民主義の動きが根強く存在した。キルギス（現カザフ）共和国では，農業人民委員ケンジンA. Кенжинの反対を押して，土地改革の終了が宣言されたし[1]，1923年のスルタン・ガリエフ事件はタタール，バシキール両共和国の農業＝土地政策にも関連し，ルイスクロフらムスリム活動家もまき込む「ソヴェト権力の枠内での植民地の存在」（スターリンの言葉）を問う事件でもあった[2]。1925年にカザフスタンで，再度，移民を禁止し原住民の土地整理を優先する土地整理の動きがあり[3]，反植民主義の論調は1920年代末まで継続した[4]。また，植民が原住民へ与えた歴史的抑圧の認識は，20年代の革命家と研究家に共有されており，新しい「社会主義的植民」の方法と課題も模索されていたのである[5]。

しかし，1929年に始まる「上からの革命」と，そこでの計画経済と全面的集団化の下で，植民が再び強力に進められることになり，植民地に於ける反植民主義の土地革命は未完のうちに，その可能性も最終的に奪れることになった。1929—32年の第一次五カ年計画期にセミパラチンスクからアルマ・アタ(旧ヴェルヌイ）まで，1,452キロのトゥルク＝シブ鉄道が敷設され，ここに40万のロシア人農民を入植させることが決定された[6]。1930年6月の第七回カザフスタン党協議会で党書記ゴロシチョキンФ. И. Горощекинは，内外からの移住入植と牧民の定住化のための巨大な「自由な土地」があると述べ，移民入植問題が新しい局面にあることを力説したのである[7]。スターリン批判を進めたフルシチョフの農政の下でも，如女地開墾が急速に進められ，ブレジネフ期に継承された。このような，1930年代に発するソ連の“社会主義的”農業開発の下では，1916年ムスリム蜂起に始まり，1921—22年の土地改革を経て，未完に終った植民と革命の問題は，革命過程の「一体性」論の成立と相俟って，全体的展望をえることなく今日に至ったのである。

注

1) Г. Ф. Дахшлейгер, Социалью-экономические преобразования…, с. 170.
2) И. В. Сталин, Сочинения. т. 5, М., 1952, с. 307.（邦訳　スターリン全集，第五巻，大月書店，307-313頁。）«Образование Башкирской Автономной социалисти-

ческой республики», сб. док. и мат., Уфа, 1959, № 386, с. 683–4.

3) Г. Ф. Дахшлейгер, Социально-экономилеские преобразования…, с. 284–9.

4) С. Садвокасов, О национальностях и националах. «Большевик», 1928, № 1.

5) И. Ямзин, Колонизация в условиях Советской власти России, «Жизнь национальностей», № 2 (31). января 1922 г. с. 1.; его же, Национальные интересы и вопросы колонизации, там же, № 16 (151), 31 июля 1922 г. с. 3; А. Скачко, К вопросу о колонизации окраин. «Жизнь национальностей», 1923, М., кн. 2, с. 14–18.

6) M. Chokaev, Turkestan and the Soviet Regime. *Journal of the Royal Central Asian Society*, vol. XVIII, July 1931, part III, p. 417.

7) Г. Ф. Дахшлейгер, Указ, соч., с. 306–7.